

# ヨハネによる福音書 連続講解説教

始・二〇〇九年一月四日

至・二〇一二年九月一六日

辻 幸宏

本説教集は、二〇〇九年と一二年に大垣伝道所において説教を行い、説教要約としてまとめたものです。元来、このように説教集としてまとめる意思などはまったくなかったのですが、語った言葉に責任を持つことを考えた時、以前に語った言葉を隠しておくのではなく、公表し、読んでいただくことが必要かと思ひ、大宮教会小会の了承を得て、印刷する決断しました。

ヨハネによる福音書は、四福音書の最後に位置し、他の三福音書（共観福音書）とは趣が異なります。一方、ヨハネの手紙（一と三）、ヨハネの黙示録と同一の著者であると考えられており、それらを参照して頂ければと願います。個人において聖書を読む時、本説教集を共に読んでいただければ幸いです。

なお、説教には日付けを入れておきました。時事問題等は現在とは異なった状況にあるものもあるからです。

既刊

公同書簡一 ヤコブの手紙

公同書簡二 ペトロの手紙一

公同書簡三 ペトロの手紙二

公同書簡四 ヨハネの手紙・ユダの手紙

ヨハネの黙示録

ヨハネによる福音書一

## 序 三八年間の病

私たちにとって朝が来ると起き上がることは普通のことです。しかし今日与えられた御言葉には、三八年間病気で苦しんでいる人がいます。彼は、足の不自由な人や体の麻痺した人と一緒に回廊で横たわっています。それだけ長い期間、病気であれば、病気が癒され、元気な姿になることなど、夢のまた夢であり、希望を失っていたのではないのでしょうか。

## I 病気を癒す池

このベトザタと呼ばれる池には五つの回廊がありました。二つの対になった池があり、四方と二つの池を分ける所に回廊が造られていました。この回廊に多くの病人が運ばれてきて横たわっていました。見るからに異様な風景です。

しかし、彼らがここに運ばれてくるのには理由がありました。水が動いた時、最初に池の水に触れた者の病が癒されたからです（七節、参照・五章三b〜四節（ヨハネによる福音書卷末））。つまりこの池の水は、たまに自ら動きまわります。私は諏訪におりましたが、諏訪では約一時間おきに間欠泉が何メートルも吹き上げ、観光客を喜ばしていました。この池にも間欠泉があり、それが上がってくる時に水が動いていたようです。水が動いた時に真っ先に水に入る人の病気が癒されました。まさに主が創り出した神秘であり、病人たちはこの池に希望を抱いていました。

## II 男のあきらめと、主イエス・キリスト

ところで、この主の癒しの業に与えることができる人とはどういう人でしょうか？ 水が動いて一番先に水の所に行くことのできるのは病気の軽い人です。三八年もの間、病気で苦しんでいる者にとっては、あきらめしかありません。周囲にいる人びとを確認して、「次はあの人だろう」と思い、自分の番はまだまだだと思えます。次々他の病人も運ばれて来ます。本人にとっては病気が癒されるとは考えることもできない絶望の人生でした。

ここで一生を終えるのだろうとの思いで、毎日、この池に運ばれてきていました。

こうした絶望の人生を送っている男の前に、主イエスは立たれます。そして、主イエスはこの男に「起き上がりなさい」と命じられます。男にとって、最初、何が語られたのか、理解できないことであつたでしょう。しかし、手・足・体全体の病気が癒され、健康な体が回復していきました。だからこそ、彼はすぐに床を担いで歩き出します。つまり、主イエスはこの男に病気の癒しを行います。この男にとっては、単に病気が癒されただけではありません。絶望から希望に、死に行く者が生きる者へと変えられたのです。

## III 苦しみの中に光る希望

しかし、今日の御言葉が与えられた私たちは、素晴らしい感動的な御言葉を讀んだ、それで終わっては何もありません。私たちは「自分は不幸だ」、「こんなこと誰にも話せない」、「理解してもらえない」……と思ひ、悲劇のヒーロー・ヒロインであろうとします。これはいわば不幸である自分を誇っています。他人をうらやむのと裏返しに、自分の不幸を自慢し、納得させようとしています。

しかし私たちは、この男を癒された主イエスがどの様なお方であるか、はっきりと知るべきです。御自身、十字架の死を遂げられながらも、三日目の朝に復活し、甦られ、死に打ち勝たれたお方です。そして主イエスは、ユダヤ人たちにこのように語りまわす。「はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。はっきり言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる」（五章二四〜二五節）。

生涯を絶望の内に終えようとしている男の横に立たれ、癒してくださいました主イエスは、この御言葉を通して私たちと共にいてくださいます。この男の癒しを信じる者は、この男と同じように死から命へと移され、主イエスは「あなたはもう死に行く者ではなく、永遠の生命に生きる者である」と宣言してくださいます。ここに真の希望があります。そして

今も、キリストは私たちと共にいてくださり、私たちの苦しみを共に担ってください。この病気が癒された男は、この後どうなるでしょうか。今までは、 magari なりに家族によって食べさせていただき、世話をしてもらっていました。しかし、病気が癒されたことを知った家族は共に喜ぶと同時に、この男への援助を止めます。つまり男は、この日から生活をするために働くことが求められます。男は「なんで癒したんだ。希望はなかったが、池の前に横たわっている方が楽であった」と不平不満を語ったでしょう。それ以上に、生きる喜びが与えられました。働くことによる労苦は、自分一人で担っているのではなく、病気を癒し命をお与えくださったキリストと共に担ってください。知っていることを知っています。だからこそ男は苦しみの中にも喜びを伴って生きることができません。

それでもなお「自分が一番苦しい、不幸だ。最低だ」との声を発する時、私たちは、この苦しみを共に担ってくださるキリストを忘れていません。自分の不幸を他人の責任、神の責任になすりつけることにより、不信仰というその本当の苦しみをキリストに背負わせています。

罪の中に生きること、そして労働の苦しみを負うことは、アダムとエバが最初の罪を犯して以来、主によって生かされている人間に課せられており、避けて通ることはできません。人と比べてしまう。それはドングリの背比べです。程度の差はあれ、この世に生きる私たちは大なり小なり苦しみを担っています。

主イエス・キリストは、この男の病気を癒し、そして共に歩み続けてくださいました。それと同時に、キリストは、今、私たちと共にいてくださいます。私たちが死から生命へと移し、さらに苦しみを覚えている私たちと共にいてくださり、私たちの苦しみを担っていただくことができます。私たちに生命を与え、苦しみを担い続けてくださるキリストの姿を、是非、避けずに御覧頂きたい。キリストと共に生きることを感じ喜びましょう。

## 「安息日の目的」

ヨハネによる福音書五章九b〜一八節

二〇〇九年八月二日

### 序

主イエスは、ベトサダの池において、三八年間病気で苦しんでいる人、つまり死を待つばかりの男の病気を癒されました。このことから、主は死ぬ者に命をお与えくださる救い主であることを示されました。

### I 「安息日」規定 労働の禁止

しかしユダヤ人たちは「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていない」(一〇節)と語り、主イエスが行われた癒しの奇跡は安息日論争へと発展していきま。ユダヤ人にとって、安息日は神が定めた日であり、人びとも厳格にこの律法を守るように求めました。彼ら自身が、主の律法に忠実にあろうとした信仰の態度を否定することはできません。むしろ見習うべきです。しかし彼らは聖書の読み方を間違っていました。主が定められた律法は、十戒第四戒にまとめられています(参照・申命記五章一二〜一五節)。第四戒では、人びとが「安息」し、労働から解放されることが、主を聖別し、主を崇める行為であると語られています。そのため、ユダヤ人たちは、労働することとは何かを徹底的に確認し、禁止事項を作成していきました。

しかし、この律法は禁止のみが語られているわけではありません。律法を遵守する行為が形式的になってはなりません。律法には主の愛が込められています。人は、罪人となつて以来、労働の苦しみを味わうようになりました。汗水垂らして労働しなければ、人は生きることができません。しかし主は、週の一日に安息を持ち、体を休める日を定めてくださいました。現代でも、労働条件が厳しくなり、休むことすらできない人びとも、多くいます。主イエスの時代はなおさらです。労働に関する規制などはなく、さらに奴隷には人権もありません。しかし主は、すべての人、異邦人、奴隷、さらに家畜に至るまで、週の内

の一日を休息することを求められました。労働からの解放は、労働の禁止ではなく、休息です。ここに平安、喜びが伴います。

この男にとって三八年間、安息日は何回あったでしょうか？ 約二〇〇〇回です。彼にとってこの二〇〇〇回の安息日に、主の平安が訪れたでしょうか？ むしろ罪人だから病気になることを人びとから指摘され、生きる希望を失わせる日となっていたことでしょうか。主イエスは彼の病気を癒すことにより、彼は絶望から生きる希望へと変えられました。休息は、心を安らぎへ、平安へ、希望へと導きます。

## II 「安息日」規定 主の安息・神の国の完成に向けて

しかし、主が求めておられる「安息」とは、単なる「休息」に留まりません。

私たちは、主なる神がなぜ私たちに十戒という戒めを与えられたのかを考えなければなりません。神の厳しさを感じておられるでしょうか？ 「くねばならない」と語る言葉に、否定的な受け止めがあり、守らなければ刑罰を受けるような脅かしのようなニュアンスも感じられているでしょうか？ しかし主イエスは、最も重要な掟として二つのことを語り、そしてそれがこの十戒を支配していることを語っておられます。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。「隣人を自分のように愛しなさい。」律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。「(マタイ二二章三七―四〇節)。つまり十戒は人びとが規制を守ることにより救いを獲得するよう求めるのではなく、主が私たちが生きるために必要な道具としてお与えくださっています。つまり、単に禁止事項が語られていると解釈するのはなく、この規定により①人びとの罪を抑制することができ、②自らの罪を示し、そして③神と人びとを愛するために用いることができます。

また、この安息日規定が語られている出エジプト記二〇章八―一節は、次のように語ります。「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。

あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。「これは天地創造において主が行われた行為です(創世記二章二―三節)。主の安息とは「祝福」と「聖別」です。神の内において私たちは祝福を得ます。そして私たちは神の子として他の者たちから分けられます。神の内に生命があります。

つまり、安息日を守る行為には、労働を休息する以上に、神の内に生きる、神の救いに生きることが意識されなければなりません。主イエスの十字架の後、キリスト教安息日として、主の日である日曜日に私たちは礼拝を守っています。私たちが、日曜日に教会に集い、礼拝を守るとは、まさに死に行く者から神の子として生きる者へと、日々の苦しみを送る者が神の祝福に満たされて生きる者にされていることが示されています。

三八年間寝たきりの男が、主イエスに出会い、体が癒され生きる者とされたのと同じように、私たちは安息日毎、つまり主の日毎に、主によって救われ生かされている希望が与えられています。

## 「三位一体なる神」

ヨハネによる福音書五章一九―二三節

二〇〇九年八月九日

## 序

主イエスは、ベトサダの池において三八年間寝たきりであった男を癒されました。ここで主イエスは、生きる希望もなく死んだも同然の人に、生命を与え、生きる希望をお与えくださいました。そのことに対してユダヤ人たちは「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていない」(一〇節)と反論します。これは、彼らが安息日を厳守し

ようと願いつつ、安息日の本来の意図、つまり主なる神の恵みを覚え、神の救いにあることを感謝する一日として与えられていることを忘れていたことを意味しています。

### I 主イエスを否定するユダヤ人たち

この時、主イエスは「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」(一七節)とお答えになります。この答えは、ユダヤ人たちにとってもう一つの問題を引き起こしました。主イエスが父なる神と同等の権威を持つておられることを示されたからです。主イエスは、病人を癒すことにより、その権威を人びとに示されました。ユダヤ人たちはこれを認めることはできません。ユダヤ人たちは、唯一の神の他に「神と等しくある者」がいることを受け入れることはできないからです。

しかし主はイスラエルに対して約束しておられます。ダビデの子として救い主メシアが与えられることです。ユダヤ人もこれを信じ、終わりの日に出現する王なるメシアを待望していました(ダニエル七章一三―一四節)。主イエスは、彼らが待望しているメシアが、御自身であることを証しされようとしています。

### II 主なる神は「わたしの父」

主イエスは「はつきり言っておく」(一九節)と語られます。「アーメン、アーメン、あなたに命じます」と訳され、非常に重要なことを語ろうとされる時に語られた言葉です。つまり、主イエスは安息日に関してユダヤ人たちの持つていた狭い信仰を打ち破り、唯一の主なる神がどの様な存在であり、父なる神と子なるキリストとの関係を示すことにより、キリスト教の真理を語り始めようとされます。つまり、唯一の主なる神を信じることで、父・子・御霊なる三位一体なる神を信じることの両者を調和させ受け入れることが求められます。このことは、主なる神しか信じないユダヤ教との決定的な違いです。

イエスは、主なる神を「わたしの父」と語られ、さらに「子は、父のなされることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなされることはなんでも、子もそのとおりにする。父は子を愛して、御自分のなされることをすべて子に示されるからである」(一九―二〇

### III 御父と御子の関係

ここで私たちは、御父と御子の関係を三つのことにおいて確認しなければなりません。

第一に、子なるイエスは父なる神と等しい方です。つまり主イエスは、ダニエル書において語られていた「人の子」、人びとが待ち受けていたメシアであることを宣言されます。神から遣わされた人の子であるからこそ、父なる神が示される人びとの救いの御業も成し遂げることが可能です。そして、父なる神から遣わされた子なる神であるからこそ、死にゆく者を憐れみ、病気を癒し、死から生へと導くことがお出来になります。罪の故に死にゆく者の憐れまれ、救おうと願っておられる父なる神の愛が、御子により示されます。

第二に父と子の関係の秩序を確認します。御父と御子には区別があり、父は子に務めを与え、父は子を遣わし、子は父に従います。子は父と等しい栄光を持ちつつ、父のご計画を子はすべて知った上で、父に従われます。主イエスが「子は、父のなされることを見なければ、自分からは何事もできない」と言われるように、子は父から独立することなく、あらゆる事において父に従属し、父のご計画に従い自らの業を行われます。父と子は位格が異なりつつも、なおも一人の神であることが示されています。これは神の奥義です。

また、救いも裁きも子なるキリストによつてなされ、神による救いに与ろうとするならば、イエス・キリストによらなければなりません。そう言った意味で、父なる神のみに目を向けている間は、真の救いを得ることはありません。救いは、御子によつて与えられているのであり、それを私たちは受け入れることが求められています。従つて、ユダヤ人たちが頑なになり、主イエスを拒絶することは、神の救いを拒絶することです。

第三に、イエスは授肉した神、人となられた神、人の子となられた神の子です。霊である神が人となられました。神御自身が人びとの中に住まい、人びとの苦しみを、嘆きを御覧になりました。三八年苦しむ希望もなく死を待っていた男の姿をつぶさに御覧になりました。息子が病気で死にそうになり、必死で主イエスによる救いを求めて駆け寄つてき

た父親の姿を御覧になられました。

#### IV 三位一体の愛の交わりが私たちに示されている

そして、様々な試練・苦しみの中、日々の生活を送っている私たちの姿を、主イエスは、今、天にあって御覧になられ、執り成してください。そして人となられた子なるキリスト御自身が、罪人の罪を担い、十字架に架かり苦しみ、死を遂げてくださいました。そして死に打ち勝ち、復活を遂げてくださいました。これこそ、主イエスがお語りになる「これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる」ことです(二〇節)。愛する御子を十字架に献げられる程に、御父は私たちを愛してください。

つまり、神の働きは愛です。御子を我々に与えたもう愛です。御子と出会うまでは私たちは本当の愛を知りません。しかしキリストと出会い、愛を知ることによって初めて、御父と御子との関係を受け入れることができます。御父が御子を愛し、その愛が私たちに示されました。御父・御子、そして今私たちに働きかけたもう御霊の三位一体なる神が、互いの内に愛に生き、十全に満たされているからこそ、御父が私たちを救おうとする恵みが、御子が示す御言葉により、聖霊によって、今私たちに示されています。

#### 「信じる者は命を得る」

ヨハネによる福音書五章二四〜二六節

二〇〇九年八月三〇日

#### 序

主イエスは、死んでも同然の病人を癒し、生きる力をお与えになりました。

#### I 命をお与えくださるキリスト

主イエスは「はっきり言っておく(アーメン、アーメン、あなたに命じます)」と語り

ます(一九、二四、二五節)。ヨハネ福音書では一七回用いられていますが、主イエスが核心的な言葉を語る時に用いられます。今日のテキストでこれが繰り返されているということは、主イエスが語られる言葉が、非常に重要な言葉であることを物語っています。それが、主イエスの御言葉を聞き、主イエスと共に主イエスをお遣わしになった父なる神を信じることです。この時、私たちは、死から命へと移されます。

ここで疑問と躓きが生じます。「死」から「命」？ 私は今生きていると。しかし、主イエスは、キリストに出会う前のあなたは死んだ状態にあることを語ります。ちょうど、ベトサダの池に三八年もの間、横たわり、死んでも同然の病人と同じです。やがて死に行く体を宿しているのであり、真には生きていません。すべては消え去るからです。

では私たちが生きるとはどういうことでしょうか？ 私たちは自分の力で生まれ、生きていく命ではありません。人は主の天地創造によって命が与えられ、私たちも神によって今日の命が与えられています。つまり人は、神と共にあり、神によって「生きよ」と語られる時、本当の意味で生きることができません。

しかし、主は私たちの命を明日にも取り除く力を有しています。そして、私たちに与えられているこの肉の体は、時が経てば死に至ります。ここで主イエスが「死」から「命」を与えると語られる命とは、この肉の体のことではありません。霊の命です。人は最初の罪により、神の裁きを免れることができなくなり、生きる者から死ぬ者へととなりました。そのため肉に死に、そして最後に主の審判がくだされます。キリストに出会う前の私たちは、皆、霊的に死んでいます。三八年間寝たきりのあの病人と同じで、肉の命はあるのですが、実質的には希望はなく、絶望の中にあります。

しかし主は、キリストに出会う私たちを「死」から「命」に移してください。それは、最後の審判において、「死」の宣告から免れ、主によって命が与えられることです。人がこのように「死」から「命」へと移されるためにキリストは十字架に架かり、死んでくださいました。このキリストにつながるものが、私たちには求められています。それが、

主イエス・キリストの御言葉に聞くことです。私たちが「命」へと移された時、私たちは、私たちに「命」をお与えになる主なる神に絶対的に服従し、主がお語りになる御言葉に聞き、御言葉に従う者とされます。

## II キリストの御声を聞く者は生きる！

主イエスがこの世に来られるまで、ユダヤ人はメシア来臨を待っていました。しかし彼らはキリストがメシアであることを拒絶しました。異邦人とされていたサマリア人もメシアを待っていました。井戸に水を汲みに来ていた婦人は、主イエスと出会うことにより、生きる水が与えられ、神を礼拝する者となりました（四章）。つまり、信じる者は救われます。救われるためには、私たちの罪が償われ、罪の刑罰が支払われることが求められます。この罪の刑罰が、キリストの十字架によって成し遂げられました。この私たちの罪の償いのために、メシアが人として来られる必要があります。そしてキリストは来臨し、救済の御業を成し遂げてくださいました。だからこそ、主イエスは「今やその時である」と語ります（二五節）。

一方「その声を聞いた者は生きる」（二五節）と主イエスが語られるのは、旧約から今の時代まで、すべての時代において生きるすべての人々のことです。アブラハムは、主の言葉を信じて、ハランを出発し約束の地カナンに行きました。七五歳のアブラハムには子どもがいまいませんでしたが、主によって子どもが与えられ、星のように増えることを信じました。アブラハムへの主の約束は、出エジプトの時代に確認できるようになり、キリストの誕生によりすべての約束が成就しました。アブラハムは自らの目では主の約束を見届けることができないにも関わらず、主を信じ、主によって救われました。

私たちは、今、主の御言葉を聞いています。主イエス御自身は、すでに十字架の御業を終え、神の国に座しておられます。私たちはキリストに直接出会うことはできません。しかし、私たちは御言葉（聖書）が説き明かされる時、キリストの御声を聞いています。キリストが天にあって生き続けているように、キリストがお語りになった御言葉も私たちの内に生き続けます。そして、キリストの言葉を聞き、受け入れ、信じる者は、死に行く者ではなく、もうキリストにあって生きる者とされています。だからこそ、私たちは、日々の生活がどれだけ苦しくても、病の中の闘病にあっても、またキリストを信じるが故に迫害にあっているとしても、人生を捨てたり、投げ出すことなく、キリストにあって命が与えられている希望に、生きることができません。

## 「最後の審判」

ヨハネによる福音書五章二七〜三〇節

二〇〇九年九月六日

## 序

主イエスは、御自身が神の子であり約束のメシアであることを人々に示すために、ベトサダの池において三八年間寝たきりであった病人を癒されました。その奇跡の御業を通して、主イエスは、ユダヤの人々と、御子の権威について語ってきました。

## I 「人の子」なる主イエス

この時主イエスは、父なる神に対して、自らを「子」であると繰り返し語ります。つまり主イエスは、父なる神と同等の子なる神であることをお語りになりました。そして、主イエスは「子は人の子だからである」とお語りになります（二七節）。「人の子」。私たちは、皆が人から生まれた人の子であると思っています。しかし聖書が「人の子」と語る時、それは特別な意味を持ちます。旧約聖書の時代、イスラエルは、約束のメシアを待っていました。それが「人の子」であると預言されました（ダニエル七章一三〜一四節）。つまり「人の子」は終末の時代に現れることを、旧約のユダヤの民は信じていました。だからこそ、主イエスが来られた時にも、ユダヤ人は終末的な王としてのメシアを待ちわびていました。しかし、目の前にいるイエス・キリストは、雲に乗って来ることもな

く、ドラマチックな存在ではありませんでした。主イエスがこの世にお生まれになったことを、私たちはクリスマススの日に喜び、盛大にお祝いいたしますが、主イエスがお生まれになった時、ほとんどの人々は見向きもしませんでした。

そのため主イエスは、旧約聖書において「人の子」と預言されていたメシアであることを示すために、奇跡を行い、御言葉によりそのことを証しされています。主イエスが語る言葉には力があります。主イエスは、旧約聖書に預言された言葉を破棄され、別の仕方でのこの世に來られたものではありません。私たちは、聖書全体を確認しなければなりません。天地万物の最初から、旧約の歴史があり、イエス・キリストが來られ、そして新約の歴史を今、刻み続けています。そして終末が來ます。旧約聖書において預言されたことは、それ以降に成就するのであり、イエス・キリストの來臨によって成就したこともあれば、いまだ成就しておらず、主イエス・キリストの再臨、つまり最後の審判によって成就する出來事も、旧約聖書に記されています。

ダニエル書において、「人の子」のような者が天の雲に乗りと語る時、私たちはキリストの再臨、最後の審判を確認しなければなりません。主イエス、十字架の死から復活を遂げられ、天に昇られる時、何を弟子たちに約束されたでしょうか。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に昇られたイエスは、天にいかれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」(使徒言行録一章一節)。これこそ、ダニエル書七章の預言です。私たちは旧約の預言とイエス・キリスト、そして終末の出來事を切り離して考へてはなりません。すべてが一直線上につながっているものであり、私たちもその直線上に立っています。

## II 終末の預言は成就する

「裁きを行う権能を子にお与えになった」と、主イエスは自らの持つておられる神としての権威を示されます(二七節)。それは、時が來ると明らかになることであり、今の時点ではまだ明らかにされていません。旧約において預言されていたことが、御自身の手にて

ねられ、終末の時に成就することを、主イエスは語られます。それこそが死者の復活と裁きです(二八、二九節)。「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り、ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる」(ダニエル二章二節)。旧約の時代から、死者の復活が預言されてきており、復活により、永遠の生命が与えられることを、人々は信じていました。「今でも、そのようなことを信じるように求めるのか?」、「現実離れしている」と、人々は語るでしょう。人々は、現実、踏襲主義です。目にしていないことを恐れます。改革はしてもらいたいと思っけていても、実際その手順が示されると、批判してしまいます。

しかし私たちは、主がお語りになった御言葉、主イエスがお語りになった御言葉により頼むべきです。旧約聖書で預言され、主イエスによって約束されたことは、必ず成就します。私たちは主なる神の救いの御業の中に入れられています。私たちは聖書を他人事として読んでなりません。天地創造から、旧約、キリストの御業、新約の歴史、そして終末とダイナミックな歴史が聖書によって展開されていきますが、その中に私たちも置かれています。

## III 最後の審判

では、主イエスが語る言葉はどのように理解すべきでしょうか。永遠の生命に入るために、主イエスが求めておられることが、「一つ語られています。人の子の声を聞くことと(二八節)、善を行うことと(二九節)。「善を行う」とは、善き業であり、主イエスに倣うこと、聖書が語ることに服従することです。これは功績主義ではありません。旧約聖書において預言され、キリストが現れ、信じる者すべてが罪赦され、救いを得るために、キリストは十字架の御業を成し遂げてくださいました。キリストの十字架の御業により、キリスト者が、復活の時、永遠の生命が与えられることは決定しています。だからこそ、神に仕え、善き業を行うことは、救いの感謝から生じ、救い主であるキリストを模範にして生き

るのです。もちろん、私たちはこの世の歩みの中にあつて、罪赦されつつ、なおも罪の中に歩んでいます。だからこそ完全な善を行うことはできません。しかし、主は私たちが主に従おうとしている姿を喜んでくださいます。

一方、「神、私を救ってください。しかし私は生活を変えることはしません」と語ることでできるとすれば、主なる神、そして御子イエス・キリストの裁きを行う権能を理解していないからです。その結果は、主による裁きです。主なる神を信じることは、救い主である主に畏れをいただくことです。今の時代、主従関係にあることが嫌われます。しかし、それは自分を主にしているのであり、そこから自分勝手、無秩序が生じてきます。主が求めておられるのは、キリストを信じるキリスト者が、すべての被造物を治め、社会に秩序を回復させることです。

## 「イエスを証しする方」

ヨハネによる福音書五章三一〜三七節

二〇〇九年九月一三日

### 序

「私が神だ」、「私がキリストの甦りである」と語る偽預言者・偽キリストは世界中にいます。私たちはそれを見破り、キリストの教会ではサタンが混入を防いできています。

### I 証しをする

しかし実際に主イエスがこの世に來られた時も、主イエスを偽メシアとして、旧約聖書で啓示されていたメシアであることを否定しました。つまり私たちも主イエスが再臨される時、真実の救い主であるかの吟味が迫られます。

主イエスは、御自身が偽預言者ではなく、真の神の御子であることを証しされます。自分一人の証言は証拠として採用されません。客観的な第三者の証言・証拠が求められます。

だからこそ主イエスも「もし、わたしが自分自身について証しするならば、その証しは真実ではない」（三一節）と語ります。

また聖書は証人の重要さを語ります（第九戒、申命記一九章一五節、一八〜一九節）。人の犯罪の有無が、証言によって定まるからこそ、偽証の刑罰は非常に重たくなります。

### II 主イエスを証しする洗礼者ヨハネ

主イエスは、まず証人として洗礼者ヨハネを挙げます。ヨハネについては、「彼は証しをするために來た。光について証しするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである」（一章七節）と語られていました。この「光」こそ、主イエス御自身です。彼の証しは、なぜ信頼に値するのか。神である方が、人によって証しされなければならぬのではありません。人間ヨハネとしての証しであれば必要ありません。「わたしは、人間による証しは受けない」（三四節）。ヨハネは、父なる神によって遣わされた預言者であり、単なる人間の言葉による証しではありません。ヨハネが父なる神から遣わされた神の預言者であるからこそ、ヨハネの証しは真実です。

### III 父なる神による証言

しかし主イエスは、ヨハネの証しだけを、御自身のメシアとしての証しに用いられることはなさいません。主イエスが遣わされた方、つまり父なる神御自身の証しについて、続く三六・三七節において語ります。第一に主イエス御自身が行われている力ある御業そのものであり、第二は旧約聖書をとおして示された父なる神の証言です。

「また、わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをしてくださる」（三七節）と語ります。「証しをしてくださる」と語る言葉は、実は完了形であり、「証しをしてくださった」と訳さなければならぬ言葉です。旧約聖書に記された神の御言葉が、主イエス御自身を証ししています。聖書によって証しされていることに關しては、三八〜四〇節、また四五〜四七節ではモーセに關して語ります（次回以降を参照）。

一方、最初に語られているのは、主イエス御自身の御業についてです。主イエスの御業

は、すでに多く語られてきました。カナの婚礼において水を良いぶどう酒に変えられた奇跡（二章）。サマリヤの女に対して生きる水を与えられたこと。役人の息子を癒されたこと（四章）。ベトサダの池で三八年病気で寝たきりの人を癒されたこと（五章）などです。どれ一つをとっても、主なる神、救い主でなければ行うことのできないしるしです。主イエスは、これらの御業こそが、すでに父なる神によって遣わされた神の御子であることを証しているとお語りになっています。

現在においても超自然現象としてテレビなどで騒がれているような事柄とは、主イエスの御業は一線を画しています。その多くは人々の注目を引くことが目的です。最初に語りました「私が神だ」と自称する人たちが、「私は奇跡を行うことができる」と語ることもこの範疇にあります。

一方、主イエスの御業は、人々の注目を集めるため、人々に気に入られるために行われたものではありません。ベトサダにおいて三八年もの間、寝たきりであった男を癒したことを考えてみてください。主イエスは、この男の苦しみを覚えておられました。そしてそれを受け入れ、担い、癒やしてくださいました。ここに神の愛があります。主イエスは、「自分が神の御子だから受け入れなさい」と人々に迫ったものではありません。日々の生活に苦しんでいる人たち、悲しんでいる人たち、一人ひとりをご存じであり、その苦しみ・悲しみを担ってくださいのお方です。そしてそれぞれ持っている苦しみ、悲しみから解放し、神の内に生きる喜び、祝福をお与えくださいます。

この神の愛が、今、私たちに示されています。主は私たちの日々の生活の苦しみを覚えていてくださいます。また死に行く恐怖を知っておられます。主イエスが人として遜りくだされたのは、まさに罪の故に死に行く私たちを捉え、罪を赦し、永遠の神の御国における祝福へと導きくださるためでした。主イエス・キリストが、真の神、真の救い主であることを証しされようとしている時、主の御業に神の愛が込められていることを忘れてはなりません。

## 結

私たちは、この後、聖餐式に与ります。聖餐式の中心は、キリストの十字架です。ここに集う私たち一人ひとりが、神から離れ、日々苦しみ、罪の故に死に行く姿を知っておられ、私たち一人ひとりの罪を赦し、神と和解し、神の御国における祝福に満たしてください。ために、キリストは十字架にお架かってくださいました。キリストの十字架は、キリストが私たちを愛してくださいました故になされた御業です。だからこそ私たちは、救いの感謝と喜びを共にすることが求められています。このキリストの御業によって示された神の愛を考えることなく、イエスが神であるかどうか議論されることは、無意味です。

## 「聖書が証しするイエス」

ヨハネによる福音書五章三七〜四〇節

二〇〇九年九月二〇日

## 序

私たちは、どのようにすれば、イエスのことを、真の神であると信じることができるのでしょうか？ 主イエスは自分自身の証しは、証言にはならないと語ります。その上で、主から遣わされた洗礼者ヨハネの証言、第二に主イエス御自身が行われる御業が、父なる神の証言に一致することを挙げられます。

## I 神の実存性

主イエスは次いで聖書（旧約聖書）の証言について語られます。ユダヤ人たちは、聖書に忠実に生きようと努めていました（三九節）。このこと自体は、私たちも見習わなければなりません。聖書にこそ、神の真理が記され、神の救い、永遠の生命の扉があるからです。だからこそ、教会においても、礼拝に出席し、説教に忠実であるべきであること、毎日家庭・個人礼拝を奨励します。旧・新約聖書は、どこを読んだとしても、人間の罪、そ

して神の救いが、金太郎飴のように記されています。

しかし、ここで問われているのは聖書の読み方です。聖書は知的に読んで、聖書知識を蓄えても、信じたことになりません。私たちに求められていることは、聖書の出来事が、私たち自身と結びつくことです。つまり聖書に記されている罪が、自分の罪と重なり、自分のこととして理解することです。同時に罪人である私たちが、聖書に記されている救いによってでなければ、助かる道がないことを受け入れることです。しかし現実には、「自分はこのような罪人ではない」、「これはあなたに語られている言葉である」と他人事として解釈してしまいます。そのため、聖書の言葉が、信仰を示す言葉となりません。

そうすれば、聖書が語る救い主が、自分を罪の刑罰としての死から救い出してくださる方であるという実存する神ではなくなり、頭で理解するだけになります。つまり、形としては神を礼拝し神に救いを求めながら、実際には自分にとって救い主は必要なく、都合の良い時だけ「神」と呼びかける存在となり、実際には自分が神の立場に立っています。こうした信仰は、思弁的となり、人を裁く律法主義となります。

## II 主の御前に立て！

私たちに求められていることは、神の御前に立つことです。私たち自身が神の御前に立ち、遜り、謙虚になり、主がお語りになる御言葉に服従することです。つまり聖書を読み、研究することにより、本当に、聖書が語る罪を自分自身のことと読み取り、聖書が語る救いが自分自身に与えられていることとして読み取る時、この救いをお与えくださる神を私たちは必死に求めるようになります。

四章に出てきたサマリアの女は、最初、ユダヤ人である主イエスが語りかけることに對して他人事でした。出来れば関わりたくないと思っていました。しかし彼女は、主イエスが生きた水、つまり永遠に生きる生命をお与えくださるメシアであることが示された時、自らの罪を受け入れ、悔い改め、そして主イエスに従う者となりました。そして主イエスが語る御言葉によって生きる者となりました。私たちに求められるのは彼女の姿です。

日々の生活・口からの言葉・心の中の感情、私たちは何一つ隠すことはできません。そしてそれら一つひとつが主の戒めに正しいか吟味されます。つまり私たちは、主の御前に立った時、誰一人として、主の裁きから逃れることができません。同時に、死に値する罪人である私を救ってくださる神おられます。この救い主の御前に私たちは立ち、また御言葉の聖書を通して探し求めていくことが求められています。

## III 救いをしめす聖書

父なる神は、メシアとして御子をお送りくださることを、旧約聖書の時代から預言してくださっていました。そしてすべての者が、それが偽預言者ではなく、神の御子キリストであると感じることができるようにと、御子を指し示す預言者エリアを遣わすとの約束を預言としてお語りくださっていました。そして洗礼者ヨハネこそが、光を指し示す預言者でした。そして洗礼者ヨハネは、イエス・キリストこそが、光としての御子であると証しました。真の救い主を真剣に求めるのであれば、ヨハネの言葉にも耳を傾けることができたはずで、そればかりか、御子イエス・キリスト御自身の御業の一つひとつ、神でなければ、成し遂げることのできない御業ばかりです。信仰の目をもって見ていけば、イエス・キリストこそが、メシアであるとの告白に至り、それに気がつかないのは、御言葉に真剣に向き会っていないからです。

神の御子として、この世に來られたイエスは、メシア、つまり救い主としての御業をなしてくださいました。それこそが十字架です。私たちは罪の故に死を遂げなければならぬ、その私たち自身の罪を、二〇〇〇年前にキリストが担ってくださいました。キリストが十字架に架かり、死を遂げてくださったからこそ、私たちは罪の刑罰としての死から解放されました。そのため、肉体の死を遂げても、最後の審判においては無罪と宣告され、神の子として、永遠の生命の祝福に入れられます。本当に自分自身が主の御前に立ち、自らの罪と向き合わなければ、主イエス・キリストの救いの御業を信じ、受け入れることはできません。だからこそ、私たちは、私たち自身が主の御前に立ち、主の御言葉である聖

書の言葉に耳を傾け、主がお語りになる救いの言葉に聞かなければなりません。

## 「神からの誉れ」 ヨハネによる福音書五章四一〜四四節

二〇〇九年九月二七日

### I 人から誉れをうける神

主イエスは「わたしは、人からの誉れは受けない」（四一節）とお語りになります。「誉れ」とは「栄光、名譽」とも訳される言葉です。主イエスは、人からの誉れを受けなくても、父なる神からの誉れを受けているからです。言い換えれば、主イエスは私たち人間が誉め称えなければ、栄光が現れないお方ではありません。主御自身が、父なる神によって栄光に包まれ、また御自身の発せられる御言葉、御業により、神の栄光を人々に示すことができるお方です。つまり自己自存の神であられます。ここに主なる神が、私たち人間と、また他の作られた神々と、明らかに違うお方であることが明らかになります。一方、私たちはイエス・キリストを救い主として礼拝し誉め称えます。それは主御自身の栄光が照らされるために、私たちが栄光を讃えるように求めておられるのではなく、栄光に満ちた主なる神は、闇の中、死に行く私たちに光を与え、永遠の生命をお与えくださいます。この感謝の応答として、私たちは主を誉め称えます。

### II 人の誉れ

キリストに誉め讃える私たち人間の側はどうでしょうか？ 私たちが主に栄光を帰せようとするとすれば、私たちは主の御前に遜ることが求められます。栄光が与えられるのは、ただ一人であり、自分を誇りながら、キリストを誉め称えることなどできないからです。そのため、私たちは自らの姿を顧み、主なる神のみ誉め称えることが求められます。しかし現実はどうでしょうか？ 多くの人たちは役職・地位・権力・名声を求めます。

社会秩序を保つために上に立つ権威者も必要です。上に立つ権威者が、自らの権威におごることなく、与えられた権力を適切に用いて職務を果たすことが求められています。しかし役職・地位を得た人々の中には、自らの役職・地位を誇り、人々の上に立つことを喜びとする人々もいます。自らを誇る者は、神が位置する場所がなく、自らが神の位置に立ち周囲の人々を見下ろし、崇められることを求めます。

私たちは、自らを誇る前に、主の御前に罪赦された罪人として、主の栄光を讃え、主によって与えられた賜物を用いて主と人々に仕えていくことが求められます。私は、キリスト者が地位や権威を持ってはならないとは語りません。むしろ主が人々に対して、世を治める権能を授けたのであり、それを知るキリスト者は、責任ある立場に身を置くべきです。そのために主は私たちに賜物をお与えくださいました。それでもなおキリスト者は、主なる神の御前に遜りキリストを崇めることを忘れてはなりません。

教会の中でも同様です。ローマ教会では、教皇や大司教が権威を持ち、国をも支配し、為政者と権力闘争する時代もありました。私たちも注意すべきです。特に、牧師・長老・執事には謙虚さが求められます。これらの職務は主から託されました。しかしこれら牧師・長老・執事は、主によって与えられた働きの違いであり、地位・権力の上下関係ではありません。また教会では、牧師が中心になります。しかし牧師が独裁者になってはなりません。牧師は、神の御言葉を司ることから、語る言葉には慎重さが求められますし、常に御言葉に忠実に語ることが求められます。牧師も一人の罪人であり、誤りも犯す可能性もあります。だからこそ、牧師にしても長老・執事にしても、教会の中では神と教会に仕える一人の主の僕であることを忘れてはなりません。

### III 神への愛

「しかし、あなたたちの内には神への愛がないことを、わたしは知っている」（四二節）。この言葉をユダヤ人たちが聞いた時、どれ程の屈辱的であったことでしょうか。神を愛し、神の救いを必死に求め、律法に忠実にあるうとしていました。ずいぶん努力を行

っていました。しかし彼らが神を愛していたのは本当か。「そうではない」と主イエスは語られます。彼らは神を愛しているつもりになつてはいる。独りよがりでした。偽装です。

「父を知る者は子を知らず、父を知る者は子を信ずる」であり、神を信じ愛する者は、神から遣わされたイエス・キリストを救い主と信じ、愛します。

では私たちは、本当に神を愛していると言えるでしょうか？ 神への愛、信仰が漠然としていませんか？ 漠然と信じている「つもり」であつてはなりません。神を信じ、神による罪の赦しと救いを受け入れる時、罪の赦しをお与えくださったキリストの十字架の御業を受け入れ、信じていることが求められます。神を信じると語りながら、キリストの十字架を見上げることができなければ、主なる神が偶像に置き換わることすらあります。さらに、キリストの十字架を見上げる時、自分に代わつて罪の償いがなされていることを受け入れ、自らの罪の悔い改めが求められます。そしてキリストの十字架によって救いが完成したことを知ると、キリストに倣う生活へと、私たちの生活自体に変化が生じます。だからこそ私たちは、自らの信仰を顧み、神を誉め称えているかを確認する時、生きて働く主なる神の御前に、十字架に架かられたキリスト・イエスの御前に、自分自身の身を置き、自らを省みることが求められます。私たちは自分を愛しつつ、神を愛することはできません。イエス・キリストの十字架によらなければ救いはありません。

## 「モーセの言葉に聞け」

ヨハネによる福音書五章四五〜四七節

二〇〇九年一〇月四日

### I 御子の地上での職務

ユダヤ人たちは、自分たちの旧約聖書解釈により、目の前にいるイエス・キリストが約

束のメシアではないと判断していました。このことを理由に、主なる神であるイエスは、ユダヤ人たちを訴えることも可能でした。主イエスは御自身が世を裁く権能をもつておられます（五章二二節、九章三九節）。しかし、主イエスは父なる神に訴えることはなさいません（四五節）。ここで、御自身がユダヤ人に対する裁きを行うことも語られません。その一つの根拠は、主イエス御自身の与えられた働きにあります。つまり、主イエスが御子でありながら、人として遜つて人となられたのは、人を裁くためではなく、罪の故に死に行く人を救い、神の子として神の国に導くためだからです（三章一七節）。

しかし同時に、神の救いに結果として与らない民があり、そうした人々は、主イエスの再臨の時、最後の審判において裁きを受けます。

### II 裁判官たる御子

裁判所において一人の人を罪に定めようとすれば、その罪に対して告発され、事件として立証されなければなりません。裁判官が罪をでっち上げ、裁くことはできません。警察なり、市民からの告発が必要です。主イエス・キリストは、まさしく最後の審判における裁判官そのものであり、御自身で罪を告発されることはなさいません。そして主イエスは、その告発者としてモーセを指名します。裁きの判断基準はモーセの律法（旧約聖書）であり、ユダヤ人たちは自ら頼りにしているモーセの律法によって罪に定められます（参照・九章三九〜四〇節）。

では、主イエスはユダヤ人たちの何を問題にされているのでしょうか？ 主イエスが言つておられるのは、彼らの行ないではなく、彼らの不信仰が裁きの対象となつています。なぜなら主イエスは、御自身の十字架によつて人々の罪を赦し、救うために世に來られたのであり、信仰に伴う悔い改めによつて救われるのです（参照・八章の姦淫の女）。

### III 不信仰故の神の裁き

信仰により罪を赦される審判者イエス・キリストの裁きの中心は、人々の不信仰です。「御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じ

ていないからである」(三章一八節)。「裁かれていゝ」と語るとおり、不信仰者の裁きは決定されています。その事実はまだ隠されていますが、最後の審判によって明らかにされます。つまり独り善がりな信仰を持っていたユダヤ人たちの罪は、最後の審判の場で、彼の信じて頼りにしているはずであったモーセの律法によって裁かれます(参照・申命記一八章一八〜一九節)。つまり、父なる神がお遣わしになった御子イエス・キリストに従わないこと、信じないことにこそ裁きの中心です。

#### IV 旧約聖書と新約聖書の関係

最後に、旧約聖書と新約聖書の関係を確認します。よく旧約と新約を、律法と福音と対立させて考える人たちがいます。イエス・キリストによって旧約の律法が廃棄され、福音に生きなければならぬと考えます。しかし主イエス御自身、「わたしに来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思つてはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はつきり言つておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない」(マタイ五章一七節)とお語りになっています。ここに連続性と、非連続性があります。律法は連続的です。私たちは律法により罪を確認し、悔い改め、律法に従うものとされていきます。しかし同時に、律法による罪は、キリストの贖いにより罪が赦されました。キリストの贖いに与る者は、その罪がキリストの贖いにより赦されます。キリストの登場により、信じる者は救われることがはつきりと示されました。しかし、律法に逆らい、キリストを受け入れない人々は、不信仰の故に裁きを逃れることができません。

#### 「主の試み」

ヨハネによる福音書六章一〜一五節

二〇〇九年一月一日

#### 序

ヨハネは共観福音書とは異なり独自の出来事が記されています。しかし今日与えられた五〇〇〇人養いは、すべての福音書で取り上げられています。またさらにマタイ一五章、マルコ八章では別に四〇〇〇人養いが記されています。この事実は、今日取り上げられているこの出来事が、とても重要なことであることを物語っているのではないのでしょうか。

#### I 予想を超えて集まったガリラヤ人たち

主イエスは、エルサレムにおいて奇跡を行われ、ユダヤ人たちと論争をされてきました(五章)、六章に入り、ガリラヤにおける出来事が記されています。そしてエルサレムではユダヤ人たちには受け入れられなかつた主イエスが、ガリラヤの人々には受け入れられました。男性だけで五〇〇〇人であり、女性や子供たちを含めれば一人を越えていたことでしょう。それだけの人々が主イエスを追つて来ました。食事の時間を忘れるほど、彼らは主イエスを求めていました。

私たちは、先日、中部中会設立五〇周年記念信徒大会を行いました。私たちが安心して参加することができたのは、プログラムや食事・宿泊などの準備が十分に整えてあつたからです。

一方、主イエスの周辺では一人の人々が集まることは想定されていません。そして食事の準備すら行われていません。そうした中、主イエスはフィリポに問いかけます(五節)。「主イエスは、人々の空腹を無視して、癒しや福音を語り続ける様なお方ではありません。フィリポは、二〇〇デナリオン(デナリオンⅡ日給)が必要であると現実的に答えます(七節)。彼は現実的に解決する能力があつたことを示します。

#### II 弟子たちへの試み

しかし、主イエスの狙いはフィリポの信仰を試みるためでした(六節)。主イエスが弟子たちに求めておられることは、目の前におられるお方が誰であるかを確認することです。弟子たちは、毎日何を目撃してきていたのか。一人一人の人々が、なぜ大挙して押し寄

せてきたのか。主イエスは人々の病気を憐れみ、癒し、救いの宣言を行われてきました。サマリヤの女に罪の赦しと救いを宣言し、命の水をお与えくださいました。つまり、弟子たちの前におられるイエスは、真の救い主です。そして弟子たちは、メシアとしてのしるしを示される主イエスと共に歩んできました。ユダヤ人たちはイエスがメシアであること拒絶しましたが、あなたたちはどのようになっているのかと問いかけられています。

### Ⅲ 私たちの救い主

イエスがメシアであれば、人々の空腹を満たすこともおできになります。出エジプトを果たしたイスラエル人は、壮年男子だけで六〇万人（出エジプト一二章三七節）でした。彼らは結果として四〇年もの間、荒れ野をさまい歩きますが、その間イスラエル人は飢え渴きを覚えることはありませんでした。主がイスラエル人を養うために、マナとうずらと水を絶えることなくお与えくださったからです。

十戒の序文に、「わたしはあなたを養った神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である」とあります。私たちに救いをお与えくださる主なる神は、何も持たない出エジプト時のイスラエル人に日々の食事をお与えくださったのと同じように、わずかなパンと魚により一万人の人々を養われました。

この主イエス・キリストは、今私たちと共にいてくださいます。そうであるならば、私たちは、現実に嘆くばかりではいけません。確かに日本の教会、そして私たちの教会は、小さく、力がありません。経済的にも援助を受けなければなりません。しかし、私たちがはすでに与えられたものを用いて、必要な奉仕、準備を行うことはできます。しかし私たちにできることは限られています。だからこそ私たちは自分の力ですべてを行おうとするのではなく、主を信じ、主に委ね、祈り求めます（参照・マタイ七章七、八節）。

主イエスは語られます。「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、

探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる」（マタイ七章七、八節）。

私たちは今から聖餐式に与ります。主は人々を養ってくださったように、主を信じる私たちに神の国における永遠の養いをお与えくださいます。主は私たちが永遠の生命、永遠に続く晩餐に招いてくださっています。このことを私たちが受け入れる時、私たちは、今日のこと、明日のことを煩う必要はありません。主が必要を整え、満たしてください。現状を嘆くのではなく、私たちの思いを超えて働いてくださる主なる神を信じましょう。

## 「主に委ねた結果」

ヨハネによる福音書六章一〜一五節

二〇〇九年一月一日

### 序

前回に引き続き、五〇〇〇人養いの箇所から聞きます。前回は、「持っていないことを嘆くのではなく、必要を主に委ね、祈ることこそが大切であることを語りました。」

### I 主イエスのしるし

ガリラヤに戻られた主イエスの所に、男性だけで五〇〇〇人、総勢一万人を超す人々が、熱狂的に集まっていました。そして、主イエスが彼らに食事を与える奇跡を行うことにより、人々の熱狂は最高潮を迎え、イエスを王にするために働きかけることとなります。

しかし主イエスはひとりで山に退かれます（一五節）。それは彼らが「しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したから」（二六節）です。人々は、主イエスが食事に与るといふ肉的事業にしようとして見ると、預言者であると確信しましたが、肉的事業に留まるとはなりません。むしろ主イエスが語られるしるしとは、目に見えない大いなる奥義です。それは、主によって食事に招かれることにより、キリストにつながり、信仰を確認することです。

主イエスは、十字架にお架かりになる前の夜、弟子たちと共に最後の晩餐に与り、主の晩餐を制定されました。ルカ福音書を例に取ると、五〇〇〇人養い、最後の晩餐、エマオの途上があり、新約の教会の主の晩餐へとつながります。しかしこのヨハネは、最後の晩餐の出来事を書き残しません。しかし六章二二節以降、命のパンについて記します。そして二一章において復活の主イエスが弟子たちの前に現れ、漁における大漁をもたらす食事を取る所に飛びます。つまりヨハネは、この主イエスの五〇〇〇人養いのしるしと神によって与えられる永遠の生命を結びつけ、説明しようとしています。

## II キリストの十字架によって満たされている罪の赦しと救い

主イエスは、人々に食事をもてなし、すべての人々が満腹になりました。つまり、私たちが主イエスによって招かれる食卓には、有り余る食事が用意されています。そして主の食卓に招かれた私たちは、欲しいだけ、満腹になるまで食べることができます。もちろん、私たちが礼拝における主の晩餐において食すパンとぶどう酒はわずかな量です。しかしこれはあくまでしるしであり、主イエスがお招きくださる神の国の食卓には実際に豊かな食卓が準備されています。つまり、主イエスへの信仰を告白し主の晩餐に与えることは、食事をとって満腹になるように、霊的に信仰的に満たされ、神の恵みに生きることができません。つまり主イエスの食卓に与ることにより、主なる神と霊的につながり、罪の赦し、永遠の生命の約束が与えられていることを確認することができます。この救いの約束を、主はキリストの十字架によって私たちに与えくださいました。

カトリック教会では、ミサに与ることにより、霊的な力が注がれることを教えます。しかしそうではありません。罪の赦しと救いは、キリストの十字架の御業により完全に成し遂げられています。そして私たちは、主の御前に信仰を告白し洗礼を授かることにより、完全なる罪の赦しをすでに得ており、神の子として、永遠の生命に既に与っています。改革派教会でも礼拝出席を求め、特に聖餐式のある礼拝に出席を求めます。しかしそれは、主なる神を礼拝することを神御自身が望んでおられるからであり、被造物である私たち人

間の最も祝福された状態が礼拝にあるからです。私たちは主の晩餐に与ることにより、主による罪の赦し、救い、永遠の生命が、すでにキリストの十字架によって与えられていることを確認します。だからこそ、私たちは主の御前に礼拝を献げ、主の晩餐に招かれることにより、救いの感謝と喜びに満たされます。ミサに出席する行為を通して、救いを獲得するものではありません。主を愛し、主を礼拝し、主の食卓に与ること、また隣人を愛し、善き業を行っていくこと、それらはすでに与えられている主による救いの感謝の応答です。喜びをもって主に仕えていく姿の表れです。

## III 残ったパン

主イエスは人々に食事を振る舞った後、弟子たちに「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と語られました。「無駄にする」とは、「滅びる」とも訳されます（参照・三章一六節、一〇章二八節、一七章一二節、一八章九節）。パンのかけらが一つも無駄にしないことは、キリストの恵みの下に置かれている人が一人も滅びないで永遠の生命を得ることの確かさを語っているのかと思います。神の子は、神のご計画に定められています。そのすべての民が主の御前に集められる時を主は待っておられます。ここで残ったパンとは、まさにまだここには集められてはいませんが、主によって集められるべき神の民のことです。残ったパンが一二籠であったことは、まだ大勢いることを物語っています。

## 「湖上を歩くイエス」

ヨハネによる福音書六章一六〜二二節

二〇〇九年一〇月二五日

## 序

五〇〇〇人養いと共に湖上を歩くイエスの記事は、マタイ、マルコ両福音書にも記され

ています。独自の出来事がほとんどであるヨハネにおいて、共観福音書に記されている出来事を改めて記すことは、著者であるヨハネが重要な出来事であると判断したからです。

### I 主イエスを知らない弟子たち

湖上を歩く主イエスの記事は、五〇〇人養いに続けて記されています。五〇〇人養いの出来事で、弟子たちには主イエスの御力が示されました。人々は「まさにこの人こそ、世に來られる預言者である」と語ります（一四節）。人々の主イエスに対するメシア像は、主イエス御自身の意図とは異なっていました。人々は主イエスを見て預言者と認めました。一方、弟子たちはいつも主イエスと行動を一緒にいて、奇跡も癒しも見てきました。しかし、弟子たちは主イエスが神の子として特別な力をもっておられることを理解することができませんでした。

### II 弟子たちの不信仰

五〇〇人養いの後、主イエスはひとり山に退かれたため、弟子たちは主イエスを残して湖を渡ろうとします。ペトロやアンデレなどは漁師であり、ガリラヤ湖を渡ることは普通に行っていました。しかし、彼らは荒れた湖に悩まされず。しかし彼らがさらに驚き恐れたのは、そうした嵐の中、主イエスが湖を歩いて近づいて來られたからです。二五〇三〇スタディオンは五km（四・六×五・五km）程です。南北二km、東西一二kmのガリラヤ湖の中程です。水深は深く、歩くことは人間には不可能です。主イエスが、真の神の御子であることを理解していれば、驚くことはありません。しかし彼らはこの事実に驚きました。つまりこの時弟子たちは、主イエスの行われた奇跡・癒しを真の意味では理解していませんでした。

私たちを救いに導き、罪の赦しと永遠の生命をお与えくださる主イエスは、自然を治め命を司られるお方です。この全知全能の主なる神である主イエスが、今、私たちと共にいてくださいます。そして嵐を恐れた弟子たちに安心と安全をお与えくださった主イエスは、私たちと今も共にいてくださり、私たちに安全と安心をお与えくださいます。日本社会

は、先行き不安定です。そのため、若い人々を中心に、不安で満ちています。しかし私たちは、弟子たちを守ってくださった主イエスを信じ、委ねることが求められています。

### III 不信仰

マタイ福音書では弟子たちの信仰がさらに明らかになります。「イエスはすぐ彼らに話しかけられた。『安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。』すると、ペトロが答えた。『主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。』イエスが『来なさい』と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ」（マタイ一四章二七―三〇節）。ペトロは主イエスを信じようとしません。しかし、完全に信じて委ねることができず、自分で判断しようとした。つまり、キリストがどの様なお方であるか、はっきりと知ることができなかった弟子たちは、信じようとする時、私たちの救い主である神がどの様な方であるかを知る必要があります。新約の教会の歴史、そして私たち自身の歩みは、まさにペトロのようなことを繰り返しています。丁度、今週は一〇月三十一日の宗教改革記念日を迎えます。ルターが宗教改革を始めたのが一五七一年一〇月三十一日です。この日、ルターはヴィッテンベルク城教会の扉に、九五箇条に及ぶ煉獄や免罪符に対する抗議文を貼り付けました。当時のローマ教会の人々も、主なる神を信じていましたが、神に救いを委ねることなく、自分の手で救いを獲得する手だてを作りました。それは聖書から離れ、最終的に教会が免罪符という紙切れ一枚で救いを売買する所まで腐敗しました。つまり教会全体が、真の信仰、真の救いを見失い、沈みそうになっていました。しかし、主なる神は、ルターやカルヴァンを初めとする宗教改革者たちをお立てくださり、そして真の救いの道をお与えくださいました。

私たちの信仰生活も同じです。私たちは主のお招きにより主なる神を信じました。しかし、は主がお与えくださった御言葉である聖書に聞くことです。神に委ねることです。しかし、

私たちは信じ切ることができず、疑問に思い、自分の思いで行動しようとしません。こうした時、私たちは、神から離れて、信仰が弱まり、沈んでいこうとします。だからこそ私たちは、繰り返し聖書に立ち戻り、神を信じる歩みを行うよう求められており、そのために、毎週、主を礼拝するよう、主は求めておられます。

#### IV インマヌエル

主イエスは、「恐れることはない」（二〇節）とお語りくださり、弟子たちと共にいてくださり、弟子たちを助けけてくださいます。弟子たちの恐れはお化けが近づいてきたかの如くです。しかし主イエスは語られます。「わたしは私である」。丁度、出エジプト記三章において、モーセが主によって召された時、主は自己紹介として「わたしはある。わたしはあるという者だ」とお語りになりました（三章一四節）。モーセに自己紹介された主が、弟子たちの前にもいてくださいます。神は、過去においても、現在においても、未来においても「わたしはある」とお語りになります。つまり主は、時代を超えて、いつも存在され、変わることはない方です。そして、自然を超えて、私たちの常識を越えて、すべてを治め、支配しておられます。そのお方が、今、弟子たちと共にいるとお語りくださいます。

私たちは、主なる神を直接目で見たり、直接話しを聞くことはできません。しかし主イエスが弟子たちにお語りになったように、私たちに對して「わたしだ」、「私はここにいる」と、今、お語りになっています。疑うことなく、救い主を信じて、歩み続けましょう。

#### 「命をお与えくださる神」

ヨハネによる福音書六章二二〜三三節

二〇〇九年一月一日

#### I 足元ではなく、前を向け！

主イエスは、男性だけで五〇〇人もの人々に食事のもてなしをされる奇跡の御業を行われた後、ひとり山に退かれました。しかし弟子たちが湖を渡るうとして強い風のため困った時、主イエスは弟子たちの所に行かれ、さらに向こう岸カファルナウムに行かれました。こうした主イエスの行動を知った人々は、主イエスを追いかけます。ティベリウスから小舟に乗って来た人々と合わせると、どれだけの人々が主イエスを追ってきたでしょうか。彼らの行動は熱狂的であり、スターを追いかけるファンのようなものです。彼らが主イエスは預言者であり、自分たちをローマ帝国の支配から解放してくださいさる王であることを信じて疑わない熱心さ、熱狂さを、私たちキリスト者も見習わなければならない面もあるでしょう。それは、主がお語りになる御言葉に従うことに熱心であることです。

主イエスは彼らに語られます。「はっきり言っておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ」（二六節）。この主イエスの言葉は、主イエスが奇跡を行われた意図と、彼らの受け止めが異なっていることを示します。つまり彼らが求めていたのは、今空腹を満たしてくださいさるメシアであり、今、ローマの軛から自分たちを解放し、ユートピアに導いてくださるメシアでした。それは、現実的、物質的な満たしです。つまり彼らは「目の前に置かれた食べ物」、「今日の生活」、「今の喜び」を求めていました。だからこそ主イエスは、彼らがパンを食べて満腹したことに對して言及します。

しかし主イエスが求めておられるのは、朽ち果てるパンではなく、朽ち果てない永遠の食べ物です。主イエスはサマリアの女に對して、決して渴かない永遠の命に至る水をお与えくださいました（四章）、ここでも主イエスは私たちに朽ち果てないパンを求めます。それは人間としての根本的な解決です。言い換えれば、自分の生活という足元ばかりを見ている人間に對して、「人間としての存在理由は何か」、「人間としての希望とは何か」という根本的なことを問うておられます。まさに私たちは、足元にある今の潤いばかりを求めているのであれば、真の希望を見つけないことはできません。視線を足元から上にあげ、

究極の目標、生きる目的とは何であるかを求めなければなりません。

## II 救いは自分で得るのではなく、神の恵みである！

「『朽ちる食べ物のためではなく、神の恵みであるかを求めなければなりません。』」  
「『朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。』」そこで彼らが、『神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか』と言うと、イエスは答えて言われた。『神がお遣わしになった者を信じることで、それが神の業である』」（二七、二九節）。ここで人々が語る「神の業」と主イエスが語られる「神の業」とに相違があります。人々が語る「神の業」とは、彼ら自身が神によつて救われるために行う善き業です。つまり彼らは、足元で自分たちの生活に直接的に与えられる食事の供給の奇跡、病気の癒しの奇跡は、受け入れることができるのですが、救いという究極的な目標に対しては、自力でなければ得ることのできないと、思っています。

一方主イエスが語る「神の業」とは、神の側から私たちに一方的に成し遂げられる御業であり、神御自身が行われる奉仕行為です。つまり「神の業」とは、神が私たちにお与えくださる恵みです。救い、永遠の生命を得ようとしても、人間は自力で勝ち取ることはできません。この違いを、まず理解しなければなりません。そして主イエスは、あなた方が求めているものは、真の信仰ではないと指摘されます。

## III 救いは御子によつて！

では、神御自身が私たちを救うために、何をとお与えくださったのでしようか。神がお遣わしになった者によつて与えられる救いです。つまり主イエスは、御自身こそが、父なる神によつて遣わされた御子であることを告白しておられます。主イエスを御することにより、救いをもたらされます。それはまさに、キリストの十字架と復活です。私たちが人間が、今の生活ばかり求め、神によつて与えられる永遠の恵みの生活を求めようとしなのは、私たちにある罪の故です。神が見えなくなり、真の喜びを失っているからです。この私たち

の持っている罪を、主イエスは御自身の十字架によつて取り除いてくださり、私たちが救いという目標を見ることができるようになりました。だからこそ私たちは、前を向き、救いを求めようとする時、神によつて遣わされたイエス・キリストの十字架を信じることで、十字架につながることを求められています。

最初に申命記八章をお読みしました。イスラエルの民はエジプトにおいて奴隷でしたが、主がお立てくださったモーセによつて解放され、さらに四〇年間荒野で彷徨っていた時にも、主は毎日マナによつて養い続けてくださいました。彼らはこの恵みを知っていません。しかし主は、あなたたちは、約束の地カナンに入ることに、この恵みを忘れてしまつたので、忘れてはならないと念押しをされます。まさに私たちが人間は、目の前に与えられた恵みには感謝し感動しますが、救いという究極的な恵みを忘れてしまつた。

だからこそ、主は、絶えず、私たちにイエス・キリストの十字架によつて救いが与えられたことを、御言葉である聖書を通して語りくださり、説教をお語りくださいます。また同時に、目で確認して、舌で確認できるように、聖餐式を守るように求めておられます。主はイエス・キリストの十字架によつて、私たちに罪の赦しと永遠の生命という救いをお与えくださいました。神によつて与えられた救いに感謝して、前を向いて歩み続けていきましよう。

## 「永遠の生命を得るには」

ヨハネによる福音書六章三〇、四〇節

二〇〇九年一月十五日

## 序

五〇〇〇人の人々は、主イエスの養いにより、食事を得ることができました。彼らはさらに主イエスを追つて、湖の向こう岸であるカファルナウムにまで流れ込んできました。

彼らは、主イエスが奇跡的なことを行うことを認めつつ、日々の糧を求めること、つまり目の前の現実の苦しみを回避する奇跡を求めていました。

### I マナが指し示すもの

しかし主イエスは、「朽ちる食べ物ではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい」（二七節）と語られます。神を信じることは、空腹を満たすような目の前にある問題を安直に解決するものではありません。言い換えれば、信仰を持つことにより、目の前にある現実的な事柄が自動的に解決されるわけではありません。

この時彼らは、出エジプトにおいて与えられたマナに解決を求めようとした（三一節）。エジプトにおいて奴隷状態にあったイスラエル人に対して、主はモーセを立て、主がモーセをおして奇跡を行い、エジプトから脱出し、約束の地カナンまで導いてくださいました。イスラエルの民は、四〇年間荒野でさまよいますが、主はモーセをおして、水、マナ、そしてうずらの肉をイスラエルに与え、彼らを養い続けてくださいました。しかし、マナによるイスラエルの養いは、永遠ではなく期限がありました。肉による食事は、時が来れば、腹が空き、また求めなければなりません。人々は、マナによって生き続けたのですが、彼らの救いは、主から与えられたまことのパン（御言葉）があったと、主イエスはお語りになります。

事実、マナを食べたすべてのイスラエルの民が救われたものではありません。モーセがシナイ山に登っている間に、金の子牛による偶像を作成し、偶像を拜んだ者たちは、主による裁きにより滅ぼされました。マナはしるしであり、救いの実体そのものではありません。天から与えられるマナにより、主による救いを求めなければなりませんでした。

### II キリストのところへ行け！

これは、まさに主イエスが五〇〇〇人養いを行われたことと同じです。五〇〇〇人養いの時、私たちは与えられたパンに目をやるのではなく、パンをお与えくださった主イエス、そして主なる神に目を向けなければなりません。だからこそ主イエスは、「わたしが

命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」（三五節）とお語りくださいます。私たちが永遠の命を得ようとするならば、イエス・キリストの所に行かなければなりません。そうすると飢えることがないパンが与えられ続け、枯れることのない水を得ることができます。つまり私たちはイエス・キリストを信じることにより、救いに与り、永遠の命が与えられます。

しかし主イエスは彼らに対して、「あなたがたはわたしを見ていないのに、信じない」（三六節）とお語りになります。彼らが主イエスを信じるためではなく、主イエスが与えるパンを求めていることを、主イエスは知っておられました。

同じようなことはサマリアにおいても起こっていました（四章）。主イエスは女に対して「この水を飲む者はだれでもまた渴く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」（一三、一四節）とお語りになった時、女は「主よ、渴くことがないように；その水をください」（一五節）と語ります。この言葉を、主イエスは彼女の信仰告白として受け入れてくださいました。

カファルナウムの人々とサマリアの女の受け答えは、それ程違いはありません。しかし主イエスのお答えはまったく異なります。この両者の違いはどこにあったのでしょうか？ 肉的事実のみにこだわりの持ち続けているか、霊的な救いに目が向いたかの違いです。つまり、なぜ私たちは生きていくのかという根本的なことに目を向けた時に、私たち人間を創造し、私たち人間に命を与え、私たち人間を救いへと導く神がおられることを信じているか、形の上では理解していても実際には信じていないかの、違いとなります（参照・ウエストミンスター小教理問一）。

問 人間の第一の目的は、何ですか。

答 人間の第一の目的は、神に栄光を帰し、永遠に神を喜びとすることです。

### III 朽ちないパンを求めて

ではなぜ私たちは、キリストに行けば救いが与えられ、永遠の生命が与えられるのでしょうか？ わたしをお遣わしになった方の御心（三八節）、つまり父なる神の御意志は、キリストの所へ行き、キリストを信じる者に永遠の命を与えることです。そのため私たちは、主がお遣わしになった主イエス・キリストの下に行き、信じるのが求められています。

キリストは、父の御心を行うために十字架の道を歩んでくださいました。本来ならば、私たちが背負わなければならない罪の刑罰としての死を、キリストが十字架に背負ってくださいました。それ故にキリストの所に行き、キリストの御業を信じる者は、神の恵みの故に、罪が赦され、神の子とされ、永遠の生命が与えられます。キリスト御自身が十字架の死から三日目に甦られたことにより、私たちも復活の命が与えられることをお示しく下さいました。主なる神は、人に命を与え、そして命を司っておられます。その方により、キリストが再臨された時、キリストにつながりキリストの十字架を信じる私たちも、復活して、新たなそして朽ちない体が与えられ、神の御国における永遠の生命が与えられます。この永遠の生命が、命のパンであるキリストの十字架を受け入れ、キリストを信じることにより、私たちに与えられます。だからこそ、目の前にある肉のパンを追い求めるのではなく、朽ちない永遠の命に至るキリストを信じ、追い求めていかなければなりません。

「いのちのパンであるイエス」

ヨハネによる福音書六章四一〜五一節

二〇〇九年一月二二日

序

ユダヤ人たちは、まかりなりにも神の存在を信じ、ローマから解放する王としてメシアが来られることを切望していました。しかし主イエスは「わたしが命のパンである」（三

五節）、「わたしは天から降ってきたパンである」（四一節）と語られることにより、人々はイエスのことを疑い始めます。そしてイエスのことでつぶやきます。

## I つぶやき

つぶやきは、「不平、苦情、陰口を言う」ことです。相手への不満であり、反抗している証拠です。ユダヤ人の主イエスへの不満は、神に対する反抗です。こうした姿は、出エジプト時のイスラエルにも見られました。彼らは「水がない、パンがない、荒野で殺す気か」とぼやき続けました。主はそれでもなお、彼らに悔い改めを求め、救いの御手をお与えくださいました。主の愛、主の恵みを顧みなければなりません。

しかしユダヤ人は主イエスの言葉を受け入れることはできませんでした。肉の思いに生きる傲慢さです。主イエスは「あなたがたの今しているのはあなた方の先祖の罪と同じである。いやもつと悪い」（四九〜五一節）と語られます。同じように否定するにしても、上から目線ではなく、まず相手の語る言葉の全体・背景を聞き、真意を確かめる謙遜さ、遜りが必要なのですが、彼らはそれすらありませんでした。これは罪意識の欠如であり、救い主である主なる神の存在を理解せず、真に信じていないことから生じています。だからこそ私たちは、主なる神が何を私たちに語り、主なる神御自身がどのようなお方であるか、主の御前に立つ私たちが何物であるかを考えることが求められています。

## II キリストを知ること

なぜ、彼らが主の御言葉を謙虚に聞くことができなかったのでしょうか。イエスと家族の私生活を知っていたことも一因です（四二節、参照・マタイ一三章五四〜五六節）。主イエスを信じている者が、イエスの私生活の環境を知り、聖書的な背景を知ることが神を知ることに益します。しかし救いを求める者が、主イエスの生活を知ったからといって、信仰は与えられません。真にキリストを救い主として信じていない限り、イエスの私生活を知ることは、人間的な興味・関心に過ぎず、キリストの真理を知り、私たちの信仰が深まることはありません。

では彼らに何が求められたのでしょうか。主が主権者であり、私たちは主の被造物であることをしつかりと知ることです（四四、四五節）。つまり、私たちは神を信じる、信じない、神の存在を受け入れる、受け入れないは、私たち自身の意志によって決定できるものと考えます。しかし、主は御自身がお語りになる御言葉の力により、私たちが神の御前に立ち、神による救いを受け入れ、神の御言葉に服従する者へと変えるとお語りになります。つまり神を信じるとは、私たち自身の積極的な行動によって勝ち取るものではありません。自分が信仰を持つのだ」とする思いを捨てていくような状態でもありません。「自分が民の御前に立ち、人々は彼らの言葉を通して、主を知り、主を信じ、主による救いに導かれました。出エジプトのイスラエルの民も、つぶやきながらも、主がお語りになるモーセの言葉に従い、約束の地カナンにまで導かれました。そして今、主イエスがイスラエルの人々の前に、そして私たちの前にお立ちくださっています。私たちは、主イエスの言葉に耳を傾けなければなりません。

信じるためには、主を知ることから始まるからです。それは主イエスの家族が誰で、どのような生活をしていたかではありません。主イエスを導かれた主なる神がどのような方であり、私たちをどのように救いにお導きくださろうとしているかという、福音の言葉に聞くことです。そのために、私たちは謙虚さ、謙遜さが求められています。その上で、私たちは主のお語りになる御言葉に聞く時、主による救いを受け入れることができるのではないのでしょうか。

### III 主イエスによって与えられる救い

主イエスはお語りになります。「わたしはその人を終わりの日に復活させる」（四四節）。「はつきり言っておく。信じる者は永遠の命を得ている。わたしは命のパンである」（四七節）。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」（五一節）。つまり、私たちが信仰を持ち、救われるため

には、主イエスの所に行かなければなりません。主イエスを信じることにより、主は私たちに復活の命を与え、永遠の命をお与えくださいます。だからこそ私たちにとって、主イエスは、永遠の生命につながる霊の糧をお与えくださるパンそのものです。そして私たちが霊の糧を得るために、私たちは主を知り、主の御言葉に聞くために、主に礼拝を献げることが求められています。

主イエスはさらに語ります。「私が与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである」（五一節）。私たちは救い主イエスの御前に立つ時、忘れてはならないことは、キリストの肉が生け贄として献げられ、十字架に架かれたという事実です。主は私たちを救うために、御子は苦しみました。キリストの十字架があるからこそ、私たちは救われました。神の愛、神によって与えられる恵みの大きさに、私たちは気がつくべきです。

## 「イエスと永遠の生命」

ヨハネによる福音書六章五一〜五九節

二〇〇九年一月二九日

### 序

今日からアドベント（待降節）に入り、御子の御降誕を覚える時が始まります。私たちは、クリスマスに与えられた罪の赦しと永遠の生命という、人間にとって本当の喜びが示されています。今年のクリスマスを迎えるにあたって、私たちは心静まり、主がお語りくださる御言葉により救いの喜びを聞くことが求められています。

### I ユダヤ人たちの誤解

ユダヤ人たちは主イエスの語られた言葉（五一節）を理解することができず、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」（五二節）と、互いに激しく論じ始めます。これはカファルナウムの会堂で主イエスが教えていた時（五九節）、つま

り礼拝中の出来事です。私たちからすれば、礼拝中に議論を始めることなど考えられないことです。しかし説教者が間違ったことを語れば、礼拝後にそのことに関して議論しなければなりません。これが礼拝中に行われるということは、彼らが主イエスの言葉に困惑していた結果です。しかし新共同訳で「激しく論じ始めた」とありますが、訳として「激しく」は強すぎる言葉です。

彼らの議論は「イエスの肉を食べることができるか」ということです。主は、旧約のイスラエルの民に、食べて良いもの・食べてはならないものを律法によって定められました。すなわち野菜や果物は食べて良い。動物の肉も食べて良いが、肉を血のままで食べてはなりません。生きたまま命あるものを食べることは許されません。すべての動物や家畜は人間の支配のもとに委ねられたのですが、命は神に直属しています。ましてや人間の肉を食べることは殺人であり、人間冒瀆・神聖冒瀆です。つまりユダヤ人たちは主イエスの語られた言葉を、聖書に語られた呪われるべき者の言葉と受け取ったのです。

## II 主イエスの御業全体から考えるパンの位置づけ

しかし私たちは、主イエスが私たちを救うために、何を意図してこのことを語られたかを考えなければなりません。今日私たちは待降節を迎えましたが、神の御子はなぜ人となることが必要だったのですか？ 罪人である私たちを救うため、私たちに代わって私たちの罪の刑罰を背負うためです。このことを忘れては、今のことは議論できません。つまり、主イエス・キリストは十字架に架かられるために人としてお生まれくださったのであり、私たちがキリストによる罪の赦しと救いに与ろうとするならば、私たちがキリストとつながりを持たなければなりません。つまり私たちは、キリストこそが、私たちの救い主と信じる時、霊的にキリストとつながり、キリストの十字架による苦しみと死が私たちに転嫁され、私たち自身が十字架の死を遂げたかのように、私たちの持つすべての罪が赦されます。さらにキリストが三日目の朝に復活してくださったように、私たちも終わりの日に復活する希望が与えられています。キリストの肉は私たちのために裂かれ、キリスト

の血は私たちのために流されました。

私たちは自身が実際にキリストの肉を食し、血を飲むことはありません。しかし主イエスは、十字架に架けられる前の夜、弟子たちと最後の晩餐を行い、主の晩餐を制定してくださいました。「イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。『これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。』食事を終えてから、杯も同じように言われた。『この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。』」（ルカ二二章一九〜二〇節）。つまり私たちは信じることにより、霊的にキリストの救いに結びついているのであり、御言葉の説教と共に、聖餐式においてパンを食し、ぶどう酒を飲むことにより、キリストの十字架において裂かれた体・流された血につながります。私たちは、聖餐式において、パンを食し、ぶどう酒を飲む時、キリストの十字架において裂かれた体、流された血は、私自身の罪によって裂かれる体、流される血であることを覚えることができます。

## III 聖徒の交わり

さて私たちは、信仰とは個人の問題であると考え勝ちです。しかしこの考えは間違いです。キリストは一人ですが、キリストのパンを食するのは私たちです。信仰・聖餐共同体であり、教会が形成されています。ヨハネ一五章にぶどうの木のとえ話が記されていますが、キリストという一本の木に、多くの房、つまり教会があり、その一つひとつの房に、多くのぶどうの実、神の民がつながっています。ですから聖餐に招かれた私たち一人ひとり、個人としてキリストにつながっているのではなく、つねに教会をおして、礼拝によってキリストにつながり、キリストの御業によって与えられる罪の赦しと救い、永遠の命につながっています。だからこそ教会なしには救いはありません。

だからこそ私たちは、聖徒の交わり、教会における豊かな交わりを重んじます。信仰・礼拝・聖餐共同体であり、一人が苦しみを覚えれば助け、励まし、祈ります（参照・Iコ

リント一二章二七節)。病の者がいれば主に癒しを求めて祈ります。キリストの体に属する人間で、不必要な人はいません。これが執事活動(ディアコニア)につながります。兄弟姉妹の痛みを自らの痛みとして覚え、重荷を共に負い、支え合うことがもとめられます。

つまり、聖餐式によりキリストの肉を食らい、キリストの血を飲むことにより、救われ、永遠の生命に生きるキリスト者は、キリストに連なる信仰共同体に属する者として、与えられる永遠の生命に向けて、信仰生活を営むことが求められています。

「命であるイエスを信じよ」

ヨハネによる福音書六章六〇〜六五節

二〇〇九年一月二六日

## I 弟子たちの離反

私たち主なる神を信じた者は、皆、神の救いに与ることを信じています。しかし、実際には「主よ、主よ」と語る者が、皆救われるものではありません。

今までは、ユダヤ人たちが主イエスの言葉を批判していましたが、今日の御言葉では、今まで主イエスに従ってきた弟子たちも、主イエスの言葉に躓きます(参照・詩編四一編一〇節、ヨハネ一三章一八節)。弟子たちの離反の顕著な例がイスカリオテのユダです(参照・六章六六〜七一節)。

一方、一二弟子は主イエスの元に留まります(六七節)。弟子と一二弟子とは違います。「使徒Ⅱ派遣された者」とも呼ばれ、キリストによって召されました(七〇節、一五章一六節)。主イエスによって集められた者と、自分の意志で主イエスに従ってきた者との違いは大きいです。

つまり神のよる救いは、自らの信仰によって勝ち取るものではなく、主なる神によって

与えられる選びによります。神の選びは、神によって神の民とされ、神の国に入れられる神の子のすべてに及びます(六章六五節、六章三七〜三八節)。

## II 天に上ることにより救われる

ではなぜ弟子たちは主イエスの言葉に躓いたのでしょうか。彼らは、主イエスが「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」(五四節)と語られた言葉に躓きます。しかし、主イエスは彼らにもう一つの躓き(昇天)について語り始めます(六二節)。「元いた所に上る」とは「前にいた所から下ってきた」ことが前提です。つまり私たちは、今、待降節を守っていますが、この時、御子の十字架と復活・昇天も覚えるよう求められています。

キリストの「上り・下り」を考える時、我々の救いと直接的な関係が出てきます。つまり救いとは、天に座しておられる父なる神につながることで、私たちが神によって創造された時の状態で天に属しているならば、救いを求める必要はなく、常に創造主であり救い主である主との豊かな交流をもち、永遠の生命が約束されていました。しかし人間には罪があり、主なる神との間に断絶があります。そのため私たちは自分の力で、父なる神の所に行くことはできません。この断絶を超えて私たちが救われ、神の国における永遠の生命を得るためには、橋渡しが必要となります。それがイエス・キリストです。神の御子であるイエス・キリストがこの世に来てくださり、私たちが天に座しておられる主なる神との橋渡し、仲保者となってくださいました。

しかし、天から御子がこの世に来てくださるだけでは、私たちは父なる神とつながることとはできません。救いとは、滅び行く私たち人間が、神の御許、天に上げられることが必要だからです。だからこそ、御子が天に昇られることにより、初めて私たちもまた天におられる父なる神とのつながりを回復します。パウロはフィリピ二章六〜一一節で、このことを端的に告白しています。また共観福音書でも、主イエスが天に属する者であることを、御姿が変貌することにより示します(マタイ一七章一〜一三節、マルコ九章二〜一三節、

ルカ九章二八〜三六節)。

仲保者イエス・キリストによって父なる神につながるため、私たちは信仰が求められています。そして信仰を確認するものとして、御言葉の説教と共に、聖餐の礼典が私たちに示されています。キリストの肉として差し出されたパンを食し、キリストの血として差し出されたぶどう酒を飲むことにより、私たちは霊的に天に属し、永遠の生命に属する者とされていることを確認します。つまりキリストの肉を食べ、キリストの血を飲むことは、霊的に父なる神につながるものが重要であって、弟子たちが躓いたように、地上で朽ち果てていく肉に固執してはなりません。

### III 永遠に生きる者

しかし地上に属する者は、主なる神との霊的な関係を理解することができません。肉に属する人間は目に見えるものしか、見ることができないからです。だからこそ彼らは、メシアは、ローマからイスラエルを再建してくださる王であることしか頭に描くことができず、ませんでした。

しかし主イエスがお示しくくださった救いとは、父なる神に属すること、交流することです。また主なる神は肉を持つことなく、霊によって生きておられます。だからこそ、私たちが救いを求める時にも、霊による救いを求めなければなりません。人間的な頭で解釈しようとするとうまく理解できません。私たちの側で、一生懸命、聖書を勉強し、神に近づこうとしても、ここで語られている弟子たちのように躓きます。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われるのです」(使徒一六章三一節)。つまり、主なる神にすべてを委ね、信じることです。疑わないことです。そうすれば、主が私たちに對して、救いの御手を差しのばしてくださり、罪の赦しと永遠の生命の約束に入れてくださいます。「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもつて礼拝しなければなりません」(ヨハネ四章二四節)。

### 「主イエスを離れる者」

ヨハネによる福音書六章六六〜七一節

二〇〇九年一月一三日

#### I 主イエスを離れる者

主イエスが奇跡を行い、力ある御言葉を語られることにより、多くの人々が主イエスに従い、弟子として一緒に行動してきました。「ユダヤ人の王としよう」とする者もあり、いわば熱狂的でした。しかし、主イエスのある言葉をきっかけに、多くの者が離れていきました(参照・五四節)。まさに嵐が近づき、過ぎ去ったようです。つまり人は何事においても熱狂的になります。自らの感情に従って行動します。しかし感情は日々変化し、熱も冷めます。主イエスを離れていった人々も、感情によって、主イエスを熱狂的に求め、「肉を食べ、血を飲む」と語る主イエスには従えませんでした。

#### II 主イエスに留まる一二使徒

一方、主イエスがお選びになった一二人の使徒たちは、主イエスから離れることはありません。彼らは自らの感情によって主イエスに従っているからではなく、主イエスが彼らを召し出し、信仰を与えられたからです。もちろん、彼らとて、この時に完全な信仰が与えられていたわけではありません。主イエスの十字架の御業をまったく理解しておらず、主イエスが逮捕されると、一時的に主イエスから離れて行きました。彼らが真の意味でイエス・キリストを救い主と信じるには、主イエスの十字架の死と復活・昇天、聖霊降臨を待たなければなりません。しかし神のご計画の内において、主イエスによって召されている彼らは、完全に主イエスから離れていくことは決してありません。

代表してペトロが語ります。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか」(六八節)。彼らは主の僕です。感情によって動いている人々は、自らが主であり、主イエスであろうと自らの感情に一致している時のみ従うだけです。イエスを救い主として

真に信じておらず、自分自身なり別のもの（偶像）を主人として居るからです。しかし使徒たちは、イエスを主として居るからこそ、他の所へ行く場所はありません。他に主として従うべき人がいないからです。羊は羊飼いがいなければ生きていきません（参照・一〇章）。これこそが信仰です。信仰は感情で動くことではありません。現実が伴います。罪の赦しと永遠の生命をお与えくださる方がここにおられ、この方に委ねなければ生きていきません。

ペトロは続けて語ります（六八〜六九節）。マタイ一六章にありますフィリポ・カイサリアにおける信仰告白に匹敵する信仰告白です（参照「あなたはメシア、生ける神の子です」一六章一六節）。

使徒たちはまだ十分には理解しておらず、信仰も不十分です。しかし主イエスこそが救い主であることを受け入れ、信じています。私たちに求められていることも同じです。教理の理解が求められますが、完全でなければダメなわけではありません。不十分な理解でも、目の前におられるイエス・キリストこそが私の救い主であり、この方によって罪の赦しも、永遠の生命も与えられることを信じ、すべてを委ねることです。

### III 悪魔が混入する教会

しかし主イエスは、「ところが、その中の一人は悪魔だ」と語られます。この時、主イエスは一二人のうちの誰が裏切るかお語りになりませんでした。使徒たちの間でも、これが誰であるかということは、最後の晩餐の時（マタイ二六章二一節）まで議論となりませんでした。使徒たちは主イエスの語られた真意を理解することができなかったからです。また主イエスが、他の一人を愛し教育を行ったように、イスカリオテのユダに対しても愛をもって接したため、そのようなことが話題にのぼることもありませんでした。

しかし問題は、主イエスがなぜイスカリオテのユダが裏切ることを知りながら、一二人の一人として選ばれたかということでした。主イエスは、ペトロが裏切りながらも、罪を悔い改め、主イエスへの信仰に立ち戻ることでできるよう、ペトロを愛されました。それと

同じように、主イエスはイスカリオテのユダも愛されました。つまり主イエスは、イスカリオテのユダが裏切ることを知っておりました。しかしユダが滅びることを良しとされたのではなく、なおも彼が自らの罪を悔い改め、主への信仰を取り戻すことを願っていました。また同時に、主イエスが十字架の御業を成し遂げるには、「わたしの信頼していた仲間、わたしのパンを食べる者が、威張ってわたしを足げにします」（詩編四一編一〇節）という御言葉が成就しなければなりません（ヨハネ一三章一八節）。私たちにとっては奥義です。私たちの教会にも、サタンは入る余地を残しています。今から聖餐の礼典に与りますが、この時「ふさわしくないまま主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです」という御言葉を朗読します。主によって、常に教会は守られ、純粋な神の民は残されています。だからこそ、私たちは、教会から離れる者が出て来ること、悪魔が混入することに対して、恐れを抱く必要はありません。神の民である私たちは守られ、神の御国の交わりに入れられているからです。

### 「神の定める時」

ヨハネによる福音書七章一〜九節

二〇〇九年一月二七日

### I 兄弟たちの思い

主イエスはガリラヤで福音宣教を行っていきます。多くの人々が「わたしの肉を食べ、私の血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」（六章五四節）との言葉に躓き、主イエスから離れて行きました。しかし主イエスは、なおもガリラヤを巡り福音宣教を続け、残った弟子たちの教育を続けておられます。

そうした中、主イエスの実の兄弟たちは、ユダヤ（エルサレム）に行くことを求めます

(三、四節)。ガリラヤはイスラエルの中で田舎でした。一方エルサレムは政治的に絶対・宗教の中心地であることは間違いないありません。兄弟たちは、正しいことを行っているのであれば、多くの人々に認められる所の方が良いではないかとの思いです。そして都エルサレムにおいて盛大に奇跡を繰り返し、人々の注目を集めれば良いではないかということ

です。伝道を行い、一人でも多くの人たちに福音を伝えることでは、兄弟たちの語っていることは一見正論に聞こえます。しかし私たちは、主イエスの兄弟たちが何を求めて、この様なことを語ったかを吟味しなければなりません。ヨハネは「兄弟たちも、イエスを信じていなかったのである」(五節)と記します。兄弟たちは、主イエスが十字架の死と復活・昇天の後、主イエスを信じる者となります。ヤコブはエルサレム教会の中心的な指導者としてエルサレム会議などでも登場し、またヤコブの手紙を記します。しかしこの時はまだ、主イエスを信じておらず、イエスの御業を表面的に、世的に見ていました。そして、主イエスが何を宣べ伝えているのかの理解ができませんでした。

主イエスは、何も密かに行動していたわけではありません。隠れることなく正々堂々と福音宣教を行っていました。その上で、御言葉と共に奇跡や癒しの御業も行っていました。福音宣教に求められることは人々に注目を浴びる事ではありません。大切なことは、福音宣教において語られる内容です。奇跡など派手やかな事が行われて人々が集まってきたとしても、福音の言葉に躓くのであれば無意味です。たとえ集まる人数が少なくとも、救いを求め、イエス・キリストの十字架の御業による救いという福音の確信を語り続けることこそが福音宣教の中心です。

兄弟たちは「公」・「ひそかに」と語ります。では私たちにとって、信仰とは公であるのか、それとも私的であるのか。日本人の多くは信仰は私的なことであり、公的なこと、仕事や自治体活動を優先する嫌いがあります。しかし、神を信じる生活が私たちの生活の基盤となり、私たちの生活の中心でなければなりません。私たちは日本人として社会や企

業・学校に属する前に、神の国に属する神の子、神の民です。そして、私たちの生きる第一の目的は、神の栄光を帰し、永遠に神を喜びとすることです(ウエストミンスター小教理問一)。食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにすることです(1コリント一〇章三一節)。信仰が個人的なことし社会の次に置いている精神こそが、日本における伝道の妨げです。信仰共同体、聖餐共同体である教会の姿を、私たちは忘れてはなりません。

## II 主イエスにおける祭りの位置づけ

さて主イエスは「わたしの時はまだ来ていない」とお語りになります(六、八節)。主イエスが語る時とは、十字架にお架かりになる時です。このことを解釈する上で、この時が仮庵祭であったことに注目しなければなりません。ユダヤにおいては三大祭(過越祭、七週祭、仮庵祭)があり、その度にエルサレムの神殿に参る、そして盛大な祭りに参加する習慣がありました(申命記一六章)。その中で仮庵祭は、現在の一〇月初旬あたりであり、通常は秋の収穫を感謝するために行われていました。しかし「仮庵」とは、つまり仮の庵(小さな小屋)であり、テントです。出エジプトを果したイスラエルが荒れ野を彷徨さまよう時、天幕が与えられたことを感謝し、主の恵みを覚えるために始まった祭りです。

一方 主イエスが十字架に架けられるのは過越祭の時です。過越祭とは、イスラエルの民が出エジプトを果たす時、エジプトの長子がすべて滅ぼされようとしています。主がイスラエルの家は過ぎ越して、裁きもたらされないように家門に血のしるしを付けることから始まります。過ぎ越しの食事は、過ぎ越しを迎えるにあたり、救いが与えられたことを主に感謝を献げながら、主によって定められたとおりに食事を行っていました。そして、主イエスが十字架に架けられる前の夜、主イエスと弟子たちとの間で行われた過ぎ越しの食事こそが、最後の晩餐となります。そしてその後、主イエスは逮捕され、十字架への道を歩んで行かれます。つまりイエス・キリストの時とは、過越祭の時に、主イエスの十字架の御業がなされ、主イエス・キリストによる救いが完成する時です。言い換えれば、主

イエスの時、十字架の御業により、過ぎ越しの救いは完成します。だからこそ、イエスの時とは、逾越祭まで待たなければなりません。

そして、主イエスの御業が完成することにより、神の民キリスト者は、仮庵（天幕）の生活から解放され、神の宮に属する者とされます。それを象徴する行為として、主イエスが十字架において死を遂げた時、神殿にあった至聖所と聖所を区切る幕が裂けました。このことにより主なる神が、地上において仮の宿である神殿に住み続けられるのではなく、神の国に在される主なる神と、地上に生きるキリスト者との間で、聖霊を通して、どこにあっても豊かな交わりにあることが示されました。つまり仮庵は廃止され、過ぎ越しは完成します。それがキリストの十字架の御業です。そういう意味で、主イエスはこの時、「わたしの時はまだ来ていない」と語られました。しかし今、主イエスの時は到来し、十字架の御業は完成しました。そして今私たちには、主イエスの御言葉と神の国がはっきりと示されています。救いの喜びに満たされて、新しい年を迎えたいと思います。

## 「イエスとは誰だ」

ヨハネによる福音書七章一〇〜一三節

二〇一〇年一月三日

### 序

先週、イエスの時、つまり十字架の時はまだ来ていないことをお語りしました。その続きとして、前の文脈を思い出しつつ、御言葉に聞かなければなりません。

#### I エルサレムに上られる主イエス

聖書は、兄弟たちが祭りに上って行ったとき、イエス御自身も人目を避け隠れるように上って行かれたと語ります（一〇節）。八節において主イエス御自身が、「わたしはこの祭りには上って行かない」とお語りになったことと、まったく矛盾した行動のようです。

なぜなのか？と考えてしまいます。主イエスは嘘を語ったのでしうか。しかし私たちは、主イエスがどの様な意味で「わたしはこの祭りには上っていかない」と語れたのかを考えなければなりません。つまり主イエスは「わたしの時はまだ来ていない」（六節）とお語りになります。主イエスの語られる「わたしの時」とは十字架の時です。私たちは、主イエスが十字架の時にどのようにエルサレムに上られたか確認しなければなりません（一二章一二〜一五節）。この時、主イエスは子ロバに乗り、人々の賞賛を受けながらエルサレムに上られました。子どもの芝居のようですが、主イエスは平和の象徴として、王の王、主の主として、エルサレムに上られました。そしてこの後、十字架へとつながります。つまり、主イエスが「公」に人々に迎え入れられてエルサレムに入城する時は、王の王、主の主としての姿です。この時こそが、主イエスにとっての「わたしの時」であり、「公」であります。

こうした形で、王の王、主の主としてエルサレムに入城しない今回は、主イエスにとつては正式にエルサレムに入城したわけではありません。そのことを主イエスはお語りになっています。

しかし同時に、主イエスは私たちの救いを完成するために、私たちの果たし得ない律法をまっとうすることが求められています。そのため三大祭としての逾越祭、七週祭、除酵祭にはエルサレムに上られました。つまり主イエスはまだ公を表す時ではないために「わたしの時はまだ来ていない」と公に宣言されたのですが、一方にあって律法を成就する意味において、エルサレムにこっそりと上られました。

#### II イエスとは誰だ

一方、ユダヤ人の間では、主イエスがエルサレムに上って来られるが、関心の的でした。彼らは主イエスの命を狙っていました（一節）。ユダヤ人たちが主イエスの命を狙い始めたのは、ベトザタの池で主イエスが病人を癒してからです（五章）。その日は安息日であり（五章九節b）、ユダヤ人たちにとっては、病人を癒す行為が「律法で許されていない

い」行為でした（五章一節）。この事をきっかけに、ユダヤ人による主イエスの迫害が始まります（五章一六節）。そして主イエスが「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」（六章五四節）と語られたことにより、ユダヤ人たちの怒りは有頂天を迎えます。

一方、一般の人たちにとっては、主イエスの評判は定まっていまらなかった（一二節）。癒しの御業にあずかったり、見たりした人たちは、主イエスに好印象を持ちました。一方、主イエスの語られる御言葉から来るユダヤ人たちの怒りに賛同する人たちもいました。ユダヤ人たちの反応を鵜呑みに信じて、反対している人たちも多かったことでしょう。またユダヤ人を恐れて公然と語ることのできなかつた人たちもいます（一三節）。信仰生活は、こうした御上意識を持つている群衆との戦いです。

### III 私たちの信仰

主イエスの「わたしの時」を迎え、主イエス・キリストの十字架の死と復活・昇天の御業は、二〇〇〇年前に成し遂げられました。主イエスは今、隠れることなどなさることなく、主の主、王の王として、世界を統治し、聖書・御言葉をおして、私たちの救い主であることを明らかにされています。

今、私たちに求められていることは、栄光に満ちて御自身を提示されているイエス・キリストを隠すことではありません。権力者が語ること、周囲の人々が語ることに、翻弄されてはなりません。私たちの主、私たちの礎は、イエス・キリストです。私たちはイエス・キリストの十字架があるからこそ、罪赦され、永遠の生命が約束されています。そして救い主である神を誉め称え、神を喜ぶことこそが、私たちの生活の中心であり、飲むにも食べるにも何をすることも、神の栄光を表すために行います。そのために私たちは、イエス・キリストが、私たちの救い主であることをはっきりと告白することが求められています。イエス・キリストが律法をまっとうし、私たちに示された道を、私たちも歩みましょう。

## 「神から出た教え」

ヨハネによる福音書七章一四〜二四節

二〇一〇年一月一〇日

### 序

受験戦争といった言葉をよく耳にします。人間を判断する尺度として学歴が問われるからです。実際の能力は関係なく、〇〇大学という看板が、判断材料となっています。

### I ラビ

こうした競争は、どこの国でも、またどの時代でも存在することです。ユダヤ人の間では、子供のうちから聖書の読み書きができ、聖句を暗唱し、自由に引用できるような教育を受けていました。その教育が済んでいる人なら、安息日に会堂で聖書朗読と解き明かしをする資格がありました。しかし、通常は専門的な訓練を受けていた人々によって聖書朗読は行われていました。学者になるため、人々はラビにつき訓練を行っていました。そしてこの訓練は、専らエルサレムで行われていました。例えば、タルソス出身のパウロの場合、彼は海外から帰国したユダヤ人であって、名門の学校ガマリエルのもとに学び、キリスト教に入信する以前にユダヤ人社会ではすでにかなり重んじられていました（使徒二二章三〜五節）。

### II 主イエスの教え

それと比較するとナザレのイエスの場合、宣教の拠点はガリラヤであり、エルサレムのどの学校にも在学していないことは明らかでした。ただ特別な学歴はなくても、正しく教えることができればラビと言われ、人々は主イエスに対してラビ（先生）と呼びかけていました。つまり一方にあって人々はどこのラビについて学んでいるのかを気にするのです。が、他方、学識があれば学歴は関係なく認める部分もありました。

ファリサイ派に属するニコデモは主イエスの教えを受け入れ、慕っていました（三章）。

また、主イエスがサドカイ人との間で復活に対する問答を行っていた時（ルカ二〇章二七節以降）、律法学者の中には、「先生、立派なお答えです」という者もいました（ルカ二〇章三九節）。そして、「この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」と語る者も多かったのです（ヨハネ七章一五節）。つまりユダヤ人は、主イエスがどこで学んだかは問題とされていましたが、一方主イエス御自身の持つておられる聖書の知識には、一目置いていました。

### III 神の教え

ユダヤ人たちにとって律法を学ぶことは、モーセが起源であり、それを引き継いだラビたちの教えを受け継ぐことが大切でした。先生の真似をすることが第一です（申命記六章六〜九節）。しかし立派なラビは、豊富な聖書知識を継承すると共に、自らの論理を持ち自らの理論を付け加えていきました。そのため、主がモーセをとおしてお語りになった律法とはかけ離れた教えが教えられ、また後の時代の人々に伝えられてきていました。つまり主イエスがユダヤ人たちに語ろうとされることは、「あなたたちの語っている言葉は、神の言葉として正しい言葉を語っているつもりだろうが、自分たちの都合に合わせて解釈されており、自分の栄光のために語る自分の言葉である」と言われました。自分勝手に、自分の栄光を求めることは、神に敵対することです。そして人間の言葉は廃れていきます。一方主イエス御自身が語る教えは、主なる神から直接出た教えであり（一六、一八節）、永遠の残る不変の言葉です。だからこそ主イエスの語る言葉は、自分の栄光を求める言葉に歪められることはありません。

主イエスのように主の言葉に直接聞くことは、現在の私たちにも求められています。そのため主は、御自身の言葉を聖書にまとめてくださいました。だからこそ、神のことばの説き明かしである説教は、聖書が正しく説き明かされなければなりません。宗教改革において、翻訳された聖書と説教が重視されたのはそのためです。しかし聖書も自由に解釈されると自分の言葉になります。そのため聖書を正しく解釈するための指針として、信仰告

白が必要となり、私たちの教会ではウエストミンスター信仰規程を採用しています。

さて主イエスの語られた言葉は何がすごいのでしょうか。主イエスの教え・奇跡・癒しは、フアリサイ人のように他人の罪を裁き、自分の誉れを讃えることはなく、死んだも同然であった者に命を与える御業です（参照・サマリヤの女（四章）、ベトザタでの癒し（五章））。ユダヤ人たちは、ベトザタでの癒しが安息日に行われたことに怒ります。しかし、ここに人を生かす主なる神の御栄光が、はっきりと示されています。

私たちは、今から聖餐の恵みに与ります。主イエスが「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」（六章五四節）と語られた言葉にユダヤ人は躓きますが、キリストが十字架に死に、肉が裂かれ、血が流されたことにより、主イエスを信じる私たちの罪が贖われ、神の子としての永遠の生命が与えられました。

### 「うわべで裁くな」

ヨハネによる福音書七章一四〜二四節

二〇一〇年一月二四日

### 序「見た目」の重要性

しばらく前に「人は見た目が九割」（竹内一郎著）という本がベストセラーになりました。日本語には「百聞は一見にしかず」といった諺もあり、「見る」ことは情報を得るための大きな手段の一つであることを語っています。

### I 言葉の力

一方言葉はどうか。今、言葉の力は失われています。ワンフレーズで叫ばれます。中身は分からない看板だけです。中身は保証されておらず悲劇をもたらします。看板だけで自分勝手に判断し、真理を確認する作業を行わないからです。ツー・カーの関係を創り出す

には、時間をかけ多くの会話をを行うことにより、徐々に積み上げていくことが必要です。それは目で見て、肌で感じて、感覚を積み重ねていくことです。

一六日、朝日新聞夕刊に渡辺信夫先生の記事が掲載されました。カルヴァンの「キリスト教綱要」の二回目の翻訳を行ったことが記されていました。(今回は)「前より文章が長く、あえて読みにくくした」と語られています。それは「分かりやすさと、真理に迫ることは必ずしも関係しない」からです。ここに真理契機があります。一回では理解できないことをばを繰り返して読むことにより、行間にある真意を読み取ることが出来ます。

## II ユダヤ人たちの殺意

主イエスは、「うわべだけで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい」(二四節)と語られます。主イエスは、「なぜ、わたしを殺そうとするのか」(一九節)と語られ、「わたしが一つの業を行ったというので、あなたたちは皆驚いている」(二二節)と語ります。ユダヤ人たちが主イエスに対して殺意を持ったのは一つの出来事がきっかけでした。それは五章の最初に記されているベトザタにおける病人の癒しです。主イエスは、三八年もの間、寝たきりであった男を癒し、歩き、自分で働くことができる体をお与えになります。しかしこの日が安息日であったため、ユダヤ人たちは安息日違反を問題にします(五章九b〜一六節)。その後、主イエスが「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」(六章五四節)、「わたしの教えは、自分の教えではなく、わたしをお遣わしになった方の教えである」(七章一六節)と語られることにより、その殺意が強くなっていきます。

ユダヤ人たちには二つの誤りがありました。①自分たちが律法を逸脱していることを理解をしていないこと。②なぜ主イエスが癒しの業を安息日に行われたかを理解しようとしなかつたことです。

十戒を理解する上で重要なのは序文です(申命記五章六節)。唯一の主、唯一の救い主である神は、イスラエルを救い出してくださった上で、主の民として歩むために必要なことを教えてくださいました。「律法の戒めを守ったらあなたを救う」ではありません。主によって一方的に救い出された者が守るべきこととして十戒が示されています。その上で第四戒が教えられています(申命記五章一二〜一五節)。ここで重要なことは、主を聖別し、一週の内の一、二日、救い主である神を覚え、礼拝を献げることです。そのために日々の働きから離れることが求められています。このことは同時に、日々の労働における肉体の苦痛を和らげます。私たちの苦しみを主はご存じであられ、主の憐れみが、一日を休息することを求めています。そしてこの主の憐れみは、主人ばかりか、家族、女、子供たち、そして人権すら与えられていなかった奴隷にまで及びます。しかしユダヤ人たちは真意を変え、守らなければ罰せられるものとしてしまいました。そして、「ここで語られている仕事とは何か」、「どこまで許されているのか」など、主が意図されていないことを、後の人々は加えていき、律法を人々を裁く道具としました。そして彼らは、主イエスが安息日に癒しをされたこと、癒された者が床を担いで歩いたことを、理由も理解せず杓子定規に裁いていきました。

## III 安息日の目的

しかし安息日は主が私たちに聖別してくださる日であり、主による救いが明らかにされる日です。だからこそ私たちは、主の日である日曜日に主の御前で主を礼拝します。私たちは、肉体の休息が必要なと同時に、神による救いを繰り返し確認しなければ、霊的に弱ってくるからです。主イエスが安息日に病人を癒されたのは、まさに主の救いが彼の上にはつきりと示され、彼自身が主を覚え、感謝と喜びをもって主を賛美し、礼拝するためです。ユダヤ人たちは、このことをまったく理解できていませんでした。

主イエスは割礼を例に出して語ります(二二〜二三節)。主はアブラハムの時代、恵みの契約のしるしとして、イスラエルの民が生まれて八日目の男の子に割礼を受けるように命令されました。神につながり、神の子として、救われるためには必須であることをユダヤ人たちは理解し、彼らは安息日であろうとなかろうと割礼を施していました。しかし割

礼を授かる時に重要なことは、神の子とされることを確認すること、神の恵みに生かされることです。このことを安息日毎に確認します。しかしユダヤ人たちは、「安息日に仕事をしてはならない」ことへのみ着目し、主イエスの言葉・行いを裁きました。

私たちに求められていること。第一に正しい判断基準、つまり自分の考え・人の考えに歪められている状態から、聖書に立ち帰ることです。そして第二に、主イエスが行われた癒しの意味を考え、理解することです。それは私たちの日々の生活においても、人の言葉や行動を直感的に判断するのではなく、行間・意味をくみ取った上で、主の御言葉によって判断することが求められています。一つの言葉、一つの行いに一喜一憂して、人を裁いたり、人格を断定してはなりません。

「イエスは救い主か？」

ヨハネによる福音書七章二五〜三一節

二〇一〇年一月三十一日

序

私たちは、今、主なる神を礼拝するために、主の御前に集められています。この時、私たちは、主と崇めているイエス・キリストがどの様なお方と考えているのか、私たちの救いとどの様な関係があるのか、さらには私たちの罪が赦され、救われ、永遠の生命が与えられるという事実をどこまで認識して、主を礼拝しているかが問われています。

I 自分の外にメシアを置く人たち

さて仮庵祭の祭りの最中、主イエスはエルサレムに上って来られました。ユダヤ人たちは主イエスの命を狙っていました（七章一一節）。ですから、主イエスがエルサレムに入って来た時、人々は、イエスが逮捕され殺されるのではないかと、たたずを飲んで眺めていました。

しかし、主イエスが逮捕されたり、暴力を振るわれることはなく、時が過ぎて行きます。そのため人々の中には、不思議がる人々が出てきました（二五b〜二六節）。そして彼らは自分勝手に推測し、イエスが主から来たメシアであるからこそ癒しの業を行うことができたのであり、ユダヤ人たちがその事実を受け入れたため、殺害するのは止めて、メシアとして受け入れたのではないかと、思いました。これは真実を知って語ったのではなく、いわゆるうわさ話のように、自分の思うままに語っていました。

しかし彼ら自身は、主イエスをメシアとしては信じていませんでした（二七節）。ただユダヤ人たちがイエスをどのようにするかを楽しむにしていたのであり、何も起こらなかつたことにガツカリしました。彼らにとってメシアとは、現実的な存在として自分が救われるために必ず与えられなければならない方として日々願い求めていたのではなく、漠然と抽象的な存在でしかありませんでした。そのため、旧約聖書に記されていることに聞かず、自らの抱いていたメシア像として、奇跡的に出現し、誰もその由来については知らないような妄想的な存在を作り上げていました。これが主イエスに対する多くの人々の反応です。

II 主イエスの叫び

しかしここで、主イエスは大声で叫ばれます。主イエスが大声で叫ばれたことは、福音書の中でも数えるほどしか記されていません（ヨハネ七章三七節、一章四三節、ルカ八章八節、マタイ二七章四六節、同二七章五〇節）。つまり主イエスがここで大声で叫ばれたのは、彼らがイエスが殺されるか否かを自分には関係のない傍観者となっていることに対する激しい憤りがあつたからです。

では皆さんにとって、御言葉に示されているイエス・キリストとはどのようなお方でしょうか？ 私たちにとって、御言葉に示されているイエス・キリストが他人事であつてはなりません。イエス・キリストが、救い主であるからこそ、私たちは今、神の御前に礼拝を献げることによる祝福に満たされています。罪の赦し、救い、そして永遠の命が与えら

れています。義務や習慣で教会に來ているのであれば、時間の無駄です。私たちは、御言葉に示されるイエス・キリストが誰であるか、そのことを確認することが求められています。

私たちは日々の生活に追われています。だからどうしても主への礼拝に集中できない方もおられます。しかしイエス・キリストは、私たちの救い主として十字架の死を遂げてくださいました。そして主イエスこそインマヌエル（主、我と共にあり）です。私たちの日々の生活が守られ、導かれているのは、すべて主の恵みです。苦しみがあれば、主に委ねて祈ることができません。しかし、私たちにとってイエス・キリストの存在が抽象的であれば、信仰もまた抽象的・心理的になってきます。そうすれば生活全体にしめる信仰の位置づけも、抽象的になり、礼拝が疎かになってきます。私たちは救いに対して傍観者となったり、私たちの信仰が抽象的になってはなりません。

### Ⅲ 御言葉に従って遣わされた主イエス

主イエスは、ナザレのイエスとして人々に知られていました。しかしユダヤのベツレヘムにおいてお生まれになったことは事実であり、また隠されていた事ではありません（参照・マタイ、ルカ福音書降誕記事）。そして旧約聖書を探れば、メシアの出現が預言されていた（ミカ五章一節）。聖書を読み、メシアの誕生を待ち望んでいた人たちはこの言葉を信じていました（参照・ヨハネ七章四一―四二節）。しかし、主イエスがガリラヤから来た田舎者であり、メシアではないと思ひこんでいる人たちは、何も知らずに、主イエスを裁きました（参照・七章二四節）。

主イエスが、この時、ユダヤ人たちによって捕らえられなかったのは、まだ、主の時が来ていなかったからです。過越祭において、実際に主イエス・キリストの体が十字架に獻げられなければなりませんでした。

私たちにとって最も大切なことは、主イエスがこの時なぜ逮捕されなかったのか、主イエスがなぜ大声で叫ばれたかを考えることではありません。最も大切なことは、あなた自身が、イエス・キリストに対して傍観者・無関心となっていないかです。イエス・キリストは、あなたのために神でありながら人として遜ってくださり、罪のない状態で十字架にお架かりくださり、死を遂げてくださいました。復活され、天に昇られたイエス・キリストは、今、あなたのために執り成しの祈りを献げてくださっています。イエス・キリストこそインマヌエルです。日々の生活の中で共にいてくださるからこそ、救いと天国における永遠の生命も実現します。信仰が抽象的になってはなりません。

## 「イエスはどこへ？」 ヨハネによる福音書七章三二―三六節

### I 今しばらく

二〇一〇年二月七日

主イエスは、祭司長やファリサイ人たちが命を狙っていることを知っていたながら、エルサレムに上って来られました。主イエスはユダヤ人として、年に三度行われる祭りの度ごとに都エルサレムに上ることを決して疎かにされませんでした。人間的な恐怖はあったでしょうが、しかし主イエスは恐れによって彼らから逃げることはされません。

主イエスは彼らに語られます。「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる」（三三節）。言い換えれば「今しばらく、あなたたちはわたしを捕らえることはできない」のです。主イエスが逮捕され生け贄として十字架に架けられるのは過越祭（春）まで待たなければなりません。今は仮庵祭です（秋）。主なる神が定められたご計画があり、今はその時ではありません。私たちの創造者であり、私たちの神が定められたご計画があり、今はそのすべて御支配になられ、その時を定めておられます。そのため、彼らは今、イエスを捕らえようと願っているながらも、私たち人間には計り知ることのできない神のお働きによって、彼らは今、イエスに対して手出しすることができません。

一方主イエスの語られた言葉には、まだ時間があるのだから、今、神の御子メシアである私を受け入れ、信じなさいとの意味合いもあります。つまり神は永遠に存在しておられ、その支配も永遠であることを、常に私たちに働きかけておられます。しかし人となられたキリストによる直接的な啓示は限定された時です。キリストの知識、救いは、御言葉である聖書・説教を通して、私たちに今示されています。御言葉に啓示されている以上、いつまでも残り、いつでもそれを信じる機会は私たちに与えられています。しかし同時に、今、真剣に耳を傾けて聞き、信じようとしなければ、いつになっても神の啓示を理解しようとすることはできません。

## II 神の国を目指した歩み

キリストは三三〇三四節の言葉を一三章三三節においても繰り返されます。キリストは、父なる神によってこの世に遣わされてきました。その方が父のもとに帰られます。父なる神の御許、天国に入ることこそが、祝福であり永遠の生命につながります。しかし「あなたたちは来ることができない」と語られます。ここにいる祭司長たちやファリサイ派の人々は、主イエスの悔い改めの求めに対して「否」を語り、イエスを十字架に架けることに荷担し、主の裁きに遭います。主のご計画、それは私たちには計り知ることのできないことですが、主の御前に罪を犯し続け、かつ悔い改めを求められながらもそれを受け入れない時、主の裁きは明らかになります。

一方、主イエスは次のようにも語られます。「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる」(一六章一六節、参照・一四章一九節)。これらは主イエスが、弟子たちに語られた言葉です。これは、主イエスが十字架の御業の後、天に昇られますが、弟子たちもまた、そこに迎え入れられることを約束してくださっている言葉です。つまり、ユダヤ人たちにとっては、主イエスがどこに行くのか分からないわけですが、主イエスの弟子たちや私たちには、主イエスがどこに行かれるかはつきりと示されています。それが父なる神の御許である神の国・天国です。

主イエス・キリストを信じるキリスト者は、すべて神の国に入れられ、そして永遠の生命が与えられます。地上の生涯は閉じて、魂は直ちに神の国に入り、復活の体が与えられ、神の国における祝福された永遠の生命が与えられる時が来ます。この時キリスト者は、地上の苦しみからいっさい解放され、罪が赦され、主の祝福に満たされます。

しかし今、私たちはこの世において生活をしていきます。キリストの十字架の御業は成し遂げられました。地上は今なお罪の支配があり世を覆っています。キリストの再臨によってもたらされる神の国の完成の時を待たなければなりません。主イエスはお語りになります。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない」(一章三五節)。キリストこそが暗闇を照らす光です。私たちは主イエスを道標として歩まなければならず、だからこそ御言葉によって啓示されているキリストの言葉に聞き従うことが求められています。そして私たち自身が主イエスの御言葉によって生きる時、暗闇の中を歩んでいる人たちが、私たちをとおして光であるキリストを見ることができるようになります。

「渴いている者、私に來い！」

ヨハネによる福音書七章三七〜四四節

二〇一〇年二月一四日

## I 仮庵祭の意義

主イエスは過越祭の期間中にエルサレムに上って来られましたが、その最中、突然、水に言及されます。ここで主イエスが水について言及されることは、私たちにとっては唐突に見えます。しかし、仮庵祭がどのような祭りであるかを理解することにより、主イエスが、なぜここで水について言及されたのかを理解することができます。

仮庵祭の意義は三つあります。第一はその起源から考えることができます。出エジプトの民は荒野で仮庵（幕屋）に住みました。主の救いの恵みを忘れないために祭りが始まりました。そのためイスラエルの民は、祭りの期間中は普段住んでいる家を出て、木の枝で作った堀立小屋の暮らしをして、神の救いを覚えしました。

仮庵祭の第二の意義は秋の収穫感謝です（参照・申命記一六章一三〜一五節）。仮庵祭は、みんなして勤労の実りを喜び、主に感謝します。男女の奴隷や寄留者も喜びを分かち合います。

そして仮庵祭の意義づけとして、次第に人々は来るべき終わりの日の成就が示されていることを読み取るようになっていきます。すなわち、過去の出エジプトの出来事への追憶、現在の収穫についての感謝、来たるべき終わりの日を待ち望むという、歴史の中に働く主なる神の救いの御業を確認するのです（参照・ゼカリヤ一四章一六〜一七節）。

## II 水

仮庵祭の間、聖書の正典には規定されていませんが、定めによって、宮を浄めるためにシロアムの池の水が神殿に運び入れられることになっていました。そして祭りの七日目に祭司がその水を携えて祭壇のまわりを七回まわりました。つまり仮庵祭では、水の持つ象徴的意味が大きかったのですが、その目指した目標が主イエス御自身にあることを、主イエスはここで宣言されました。

神の救いと水との関係を聖書において確認することは重要です。聖書では、水こそが命の源として、主の恵みを示すものとしての位置づけられています（イザヤ四一章一七節、八章六節、詩編四六編五節）。救済史的に考えると、創世記二章一〇〜一四節では天地創造における神の恵みとして四つの川が流れ出たことが示されています。その後の人間の罪に關しては、出エジプトにおいてはイスラエルの人々は荒野に置かれ、水は渴きます。しかし主は救いをお与えくださる方として、エルサレムから命の水が湧き出る恵みがあることをゼカリヤ一四章七〜八節においてお語りくださいます（参照・エゼキエル四七章）。そ

して回復された神の国の姿が黙示録二章〜五節で描かれています。

主イエスが「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」と語られたのは、まさに終末的な完成について宣言されたのです。

## III 主イエスの大声での叫び

主イエスは、まさに今、私たちを、主による救い・命の水に生きる者として、主の御前に招き入れてくださろうとしています。主の招きは価なしの恵みであり、かつ大声で叫びつつ招いていてくださいます。誰もがこの主イエスの声に耳を傾けたことでしょうか。日々の生活に苦しみつつ、真の救いを見失っている者に対する主イエスの大声での呼びかけであり、これを拒絶した所に救いはありません。

そして主イエスは、「わたしのところに来なさい」と語られます。主イエス・キリスト御自身が救い主だと言われています。命の水は他のものからは手に入れることなどできません。キリストからしか恵みは来ません。

主イエスはさらに「わたしを信じる者は、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」（三八節）とお語りになります。水を飲んだら、一時的に潤っても、また渴き、水を求めます。しかし、主イエスによって与えられる命の水は、サマリアの女にお語りになられたように、もう渴くことがありません。いや信じる私たち自身が泉となりま

す。信じる私たちは命の水を既に得ており、御言葉に聞き続けることにより、命の水が湧き続けます。

そして最後にヨハネは、「イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている“霊”について言われたのである」（三九節）と付け加えます。主イエスが語られる水は、霊です。水が涸れないのは、水によって象徴されているものが霊だからです。そして、霊がまだ降っていないと聖書は語りますが、主イエス・キリストの十字架と復活の御業の後、聖霊が与えられることが約束されています。その聖霊が今、私たちに与えられています。

## 序

イエス・キリストが誰であるか？ この問いかけは私たちにとって重要な問いかけです。聖書は「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」（使徒一六章三一節）と語ります。そしてキリスト教会は、イエス・キリストを救い主と信じる人たち、あるいはそれを求める者たちが集められるところです。従って聖書を読み、聖書を研究しても、イエス・キリストを救い主と信じない人たちの群れは、キリストの教会ではありません。

## I 上司からの命令に逆らう下役たち

祭司長やファリサイ人と彼らの下役たちが、主イエスに対してどのような考えたのか、御言葉から確認します。祭司長たちはイエスを殺そうと狙っており、下役たちにイエスを捕らえてくるように命じました。下役たちは任務を遂行することが求められ、任務を遂行しなければ罰せられることを覚悟しなければなりません。事実、彼らは祭司長たちに叱責されます（四五節）。つまり、下の者は上の者に従うことがこの世の秩序であり、一般論として私たちもそういう秩序を認めなければなりません。

しかし、私たちはすべてにおいて上に立てられた権威者に従わなければならないかと言えば、そうではありません。上司の命令であっても実行できない場合もあります。それは命令が間違っている場合です。つまり神のみが良心の主であり（ウエストミンスター信仰告白二〇章二節）、主なる神のみを信じること・隣人を愛することから離れ、罪を犯すように求める命令には、抵抗・戦うことが求められます。つまり私たちは、意志を持たず機械の歯車のようにただ服従すれば良いのではなく、キリスト者として神の御言葉に従いつ

つ、人に仕えなければなりません。

この時、下役たちは、主イエスを逮捕すべきでない判断して、何もせず帰って来ました。祭司長たちに咎められると、理由を述べて反論します（四六節）。隣人への愛から出てきた倫理的な理由ですが、同時に、神への信仰から出てきた言葉です。福音の言葉を聞き、信じた者として、福音を語られた主イエスを逮捕することなどできませんでした。

## II 聖書の言葉に聞くこと

この時ファリサイ人は「律法を知らないこの群衆」と語ります（四九節）。「自分たちは、律法を研究して、正しく解釈し用いている。しかし群衆は律法を学んでいないから、無能であり、彼らの語ることは聞くに足りない」と言うことです。これは彼らの傲慢さから出てきた言葉です。これは上に立つ者、説教者・牧師であれば常に注意しなければならぬことです。

彼らが語るように、律法・聖書を学び研究することは必要です。聖書の言葉に聞くことなく、人からの言葉を鵜呑みに信じることから危険が生じます。そのために、私たちは、聖書を手を持ち、聖書を読み、自ら解釈を行うことが求められています。

ところで群衆は本当に無知であったのでしょうか？ ユダヤ人は、神の民として、親から子へ、子から孫へと「出エジプトにおける主の救いの恵み」と「律法」が教えられてきました（申命記六章六〜九節）。知らないのではなく、知っているからこそ、主イエスが語られた福音に対して、「この人はメシアだ」という答えが出てきたのです。「メシア」か「否」かの判断ができること自体、教育をされてきている証拠であり、知らなければ自ら判断することはできません。

またファリサイ人は、「議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか」（四八節）とも語りました。無知と学識の違いが、不信仰と信仰の違いになると言わんばかりの主張です。しかしニコデモは語ります（五一節）。ニコデモは、ファリサイ派に属する議員でありつつ、主イエスの教えを請いに、隠れて夜中に、主イエスの所に

来ていました（三章）。つまり彼は主イエスを信じようとしていました。しかし、周囲のユダヤ人たちの手前、隠れキリシタンとなっていました（参照・ヨハネ一九章三九節）。律法では二人の証人を求めます。同時にローマ法では、本人の事情を聞くことが求められています。このことをニコデモは語っています。つまりニコデモの主張は、「祭司長やファリサイ人たちが一方的に主イエスや群衆を裁こうとしている」として、警告の言葉を発しています。ニコデモは信仰告白に近い勇氣ある発言をしました。

これに対して彼らは語ります。「あなたもガリラヤ出身なのか。よく調べてみなさい。ガリラヤからは預言者の出ないことが分かる」（五二節 参照・七章四一〜四二節）。メシアがダビデの子孫であることはよく知られていたことです。しかし、預言者がガリラヤからは出ないとは語られています。むしろイザヤ書八章二三節に聞くべきです。ガリラヤは栄光を受けています。彼らは聖書に記されていることを記していないと思ひ込み、また、聖書に記されている約束のメシアを受け入れようとしていません。

神を信じることは、聖書を正しく読み、正しく解釈することから始まります。主イエス・キリストは十字架に架かり、死を遂げられます。そして三日目の朝に復活されました。それは主イエスを信じるすべての者の罪の贖いとなつてくださるためであり、信じる者は、イエス・キリストによつて永遠の生命が与えられます（ヨハネ十一章二五〜二六節）。

「あなたを罪に定めない」

ヨハネによる福音書七章五三〜八章一一節

二〇一〇年二月二八日

序

今日与えられた箇所は、全体が括弧に囲まれています。これは、古い写本には含まれておらず、使徒ヨハネ自身がここに書き記したものではありません。明らかになっているか

らです。ただこの話題が、一世紀の文書などにも残されており、神の御言葉に相応しいとのこと、ヨハネのこの場所に残されることとなつたようです。なぜ、聖書に残されたのか、なぜヨハネなのか、なぜここなのか、と言つた疑問を考えていくは、楽しいことかも知れませんが、聖書研究の時間ではなく、主がお語りになる御言葉に聞く説教として、御言葉本文から考えていきたいと思ひます。

I 姦淫の女を連れて来たユダヤ人たち

主イエスが神殿の境内に入られると、民衆が皆やって来たので、座つて教え始められました。しかし主イエスが話し始められると、それを中断せざるを得なくなり、律法学者やファリサイ派の人々は、姦淫の現場で捕らえられた女を連れて来たからです。すでに語つてきたように、彼らは主イエスに対して殺意を持つており、ここに姦淫の罪を犯した女を連れて来たのも、主イエスを畏にはめようとする意図がありました（六節）。

II 姦淫の罪

さて今日、性的乱れは甚だしいです。しかしこれは時代の変化の問題ではありません。人間の罪の根本的な問題であり、社会的に許されるか否かの問題ではありません。姦淫は十戒の第七戒で禁じられています。人間はそれが罪であることが示されなければ、忘れてしまう程、罪にむしばまれています。そのため主は律法でお示しくださり、繰り返し語られ、人が忘れないようにされています。「悪いからダメ」では人は理解できません。

姦淫の罪に関しては根本的に理解していただければなりません。主は人間を最初につくられた時、男アダムに対して女エバをお与えくださいました。それは助ける者が必要だったからであり、互いに助け合う存在として、つまり別の賜物を与えられた者として、主によつて男と女が与えられました。この最初の状態では性的な誘惑はありませんでした（創世記一章二五節）。性的な乱れが生じたのは、アダムとエバが最初の罪を犯してからです。このことが永遠に罪の歴史として続いていきます。そして旧約聖書においても、選びの民であるイスラエルもまた、繰り返し姦淫の罪を繰り返して、主の裁きが繰り返されます。

### Ⅲ 主イエスと律法学者たち

ユダヤ人たちは、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来ます。彼らの狙いは、この女を正しく処罰することではなく、主イエスが女に対してどの様な対応をするかを試したのです。つまり、主イエスがモーセの律法に従って「この女を石で打ち殺せ」と語れば、罪人に対する神の憐れみと赦しを語ってきた教えと矛盾します。また逆に、石で「打ち殺してはならない」と語れば、モーセの律法に反するために訴える口実を得ることができません。また、当時死刑判決を行うことはローマ帝国にのみ認められていたため、ローマ帝国の権威に立ち向かう者として、告発することもできませんでした。

この挑発に対して、主イエスはかがみ込み、指で地面に何かを書き始められるだけで、何も行いません。ここで主イエスが地面に何を書いていたのか詮索する必要もありません。また、主イエスは手をこまねいていたのでもありません。主イエスは、彼らが自分たちが何を行っているのか考える時をつくられたのです。しかし、彼らは主イエスに対して、対処を求め続けます。彼らは、主イエスがどの様な対応をするかしか関心がなく、この女がどうなるのか、自らの行いに関して、吟味することはできませんでした。

こうした情況が続く中、主イエスは、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」（七節）と語られます。裁判とは、公正でなければなりません。一人の当事者のみを連れて来て、裁判は成立しません（申命記二二章二二節）。訴える彼らもまた、彼女を裁くのに相応しい者であるのかを吟味する必要があります。主イエスが一言語られることにより、主イエスがどのように対応されるかということから、彼らがどのように対応するのかという問題となり、状況が逆転します。

#### Ⅳ あなたはどうなのか？

皆さんはこの御言葉を聞きながら、群衆の一人として主イエスがどの様な対応を取るのだろうかと見守っているのではないのでしょうか。しかし主イエスは私たちに對しても、「あなたはこの女を裁くことができるか」と問うておられます。私たちは自らを省みるこ

とが求められます。罪とは行い・言葉・心において神の律法に少しでも適わないことです。私たち自身、主イエスの十字架による救いを求める者として、女を裁くことはできません。さてここに残されたのは、姦淫の女一人です。主イエスは女に對して「わたしもあなたを罪に定めない。あなたの罪は私が十字架に背負う」（一一節）とお語りくださいます。私たちは自らを省みるならば、この場を去るしかありません。しかし主イエスの声が届かない所に行けば良いものではありません。私たちは主イエスの前を去っていく人々であると同時に、主イエスの前に立たされてる女の位置に私たち自身の身を置かなければなりません。この女の罪を主イエスが十字架に担ってくださったように、主イエスから離れるしかなかった私たちの罪をも、主イエスは十字架に担ってくださいました。

### 「世の光、命の光」

ヨハネによる福音書八章一二〜二〇節

二〇一〇年三月七日

#### I ヨハネの語る「わたしはくである」

「イエスは再び言われた」（一二節）と語られます。これは七章三七〜三九節を受けた言葉です。この時、主イエスは大声で叫ばれました。主イエスはサムリヤの女に語られたように（四章）、自らが永遠に生きる水であることをお語りになり、自らに来るように求めておられました。

「わたしは生きた命の水である」ことをお語りになった主イエスは、今「わたしは世の光である」と語られます。ヨハネは、他にも「わたしは命のパンである」（六章四八節）、「わたしは門である」（一〇章九節）、「わたしは良い羊飼いである」（一〇章一一節）、「わたしは神の子である」（一〇章三六節）、「わたしは復活であり、命である」（一一章二五節）、「わたしは道であり、真理であり、命である」（一四章六節）、「わたしは

まことのぶどうの木である」（一五章一節）と語られます。これらの主イエスの言葉により、私たちは主イエスが何者であり、私たちに對する約束と命令が何であるかを考えなければなりません。主イエスが私には関係のないお方としてこれらの言葉を聞くことはできません。

## II 世

「わたしは世の光である」。「世」とは、私たちの生きている世界、この世のことです。ヨハネは福音書の最初「初めに言があった」（一章一節）と語り始めましたが、続けて次のように語ります。「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」（一章四、五節）。つまり、ヨハネは世とは暗闇であることを前提に、言であり、命であるキリストが世に來られたことを語ります。経済の発展、科学進歩、農業の進歩によって人々の生活は日進月歩です。現代は、ヨハネが聖書を記していた時代とは雲泥の差であるように思われます。しかし今なお、この世は闇です。それは「神を求めること」、「命を求めること」において闇です。それは罪の故に、人が死を避けて通ることができないために生じています。人は、食べること、住むこと、生きることに於いては不自由がなくなり快適に暮らせるようになりました。そのことにより、人々は神を求めようと、神に祈ることを忘れました。そして死までの間、快適に生きることを求めるようになりました。死に對して割り切つて悟りを持つているようですが、ここにあきらめがありません。そして死を考える老後が問題となります。

しかし聖書は、「死」によってすべてが終わると思つている根本的な生き方にこそ、誤りであると語ります。つまり、神を求めないことは暗闇を歩いているのであり、暗闇を歩く限り、正しい到着点に着くことはなく、その結果は罪の刑罰としての「死」です。キリスト者が福音を宣べ伝える時、「信じれば救われる」と語る前に、まずこの事実、つまり神を知らずに歩んでいることは「闇」の中を歩んでいることを認識していただなければ、人々はなぜ救いが必要なのかを理解することすらできません。

## III わたしは世の光

創世記一章において、主なる神は天地万物の創造の最初に「光」を創造されました。「光」もまた主の被造物です。ですから「光」を神にしてはなりません。しかし主イエスは「世の光である」とお語りになります。主イエスは、被造物の姿を取られたのでしょうか？

父・子・聖霊なる三位一体の神は、無限・不変・永遠の霊であられ（ウエストミンスター小教理問四）、私たち人間には計り知ることのできない存在です。そのため、神の存在を私たちは人間が理解しようとするならば、私たちに示された被造物に譬えて語らなければ、私たちは理解することができません。そのため主イエスはあえてこのように表現されます。ではどうでしょうか？ 主イエスこそが世を照らす光であれば、「世」|| 「闇」ではなくなりません。「世」にキリストという光が差し込んでいます。そうであれば、「世」にある限り「死」は避けられないという人々の思つている前提は、覆されます。

そしてキリスト者は、この暗闇の世に於いて、世の光としてのキリストを証しする者として立てられています。それはキリストによって光が与えられ、歩むべき道が示されているからあり、それは同時に、その道を歩んでいる私たちをおして、人々は救いにいたる道を知ることができるからです（マタイ五章一三、一四節）。

では、暗闇の世に示された世の光としての主イエスは、私たちにどこへ行く道を示してくださっているのでしょうか？ キリストの十字架を信じる私たちにも、永遠の生命にいたる道があることをお示しくださっています。だからこそキリストは、「わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」とお語りくださいます。

## 序

主イエスは「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」（八章一二節）とお語りになりました。十字架の死から復活を遂げてくださった主イエス・キリストを信じる私たちは、光である主イエスに照らされ、永遠の生命への道が開かれています。

## I 主イエスの証し

しかし直後に、フアリサイ派の人々は「あなたは自分について証しをしている。その証しは真実ではない」（一三節）と語ります。彼らの語ることに一理あります。なぜなら、人は自分のことをいくら語っても、他人の証言や客観的な事実がなければ正当性が認められることはありません。無意識に自己弁護するからです。それが裁判の証人においても語られていることです（第九戒、申命記一七章一〜七節）。しかし主イエスは、「たとえわたしは自分について証しをするとしても、その証しは真実である」（一四節）とお語りになります。私たちは重要なことを忘れてはなりません。今まで語られてきたことは、人の語ることです。人は、罪を持って生まれ、日々罪を積み重ねます。だからこそ、偽りの証言が行われることを前提にします。しかし、主イエスの証言は、神御自身の証言です。神の証しは、真実で真理そのものです。

私たち人間は、主なる神が御自身を啓示してくださるにより、神を初めて知ることができません。だからこそ私たちは、神の御子であるイエス・キリストのお語りになる御言葉に聞かなければなりません。そして主イエスの証言の確かさは、神の啓示の書である聖書自身が答えています。主イエスは常に旧約聖書の言葉に従って語っており、旧約聖書自身がメシアの到来を預言しています。

## II 人の裁き、主の裁き

そして主イエスはフアリサイ人たちに語られます。「あなたたちは肉に従って裁くが

：」（一五節）。彼らは常に、人々よりや主イエスよりも一段高い場所に位置し、上から判断を下そうとしています。しかし主がお語りになる律法は、他人を裁くための判断基準の道具であってはなりません。むしろ自らが律法の前に立ち、自らの姿を顧みなければなりません。律法により、私たちの行い・言葉・心のすべてが吟味されます。そして私たちは主なる神の御前に、その罪が明らかにされます。つまり主の御前に立つ私たち自身が、主なる神による救いがなければ、救われることのできない罪人であることを自覚しなければなりません。そうであれば、隣人を裁くことなどできなくなります。

そして主イエスは、「わたしはだれをも裁かない」とお語りになります（一五節）。主イエスは、地上の生涯においては、ユダヤ人の罪を指摘しつつも、裁きは行われませんでした。それは裁きを猶予して、一人ひとりが自らの罪を受け入れ、悔い改め、主イエスへの信仰を持つ時を待っておられたからです。これがキリストの教会のあるべき姿です。だからこそ、主イエスは主の祈りにおいて「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」と祈るように命じられます。

主イエスは続けて、「もしわたしが裁くとすれば、わたしの裁きは真実である」（一六節）とお語りになります。これは最後の審判を指し示しています。父なる神は全知全能であられ、私たちのすべてをご存じです。私たちの隠しておきたい行い・言葉・心にあるすべての罪をもご存じです。そして主イエス御自身「わたしはひとりではなく、わたしをお遣わしになった父と共にいるからである」（一六節）とお語りになります。御父と御子の交わりがここにあります。だからこそ、主イエスが行われる裁きは、真実です。

しかし主イエスは、主なる神を信じる者に対しては、キリスト御自身の十字架による贖いにより罪を赦し、救い、永遠の生命に定めてくださいます。つまり主イエスの行われる裁きは、肉に従った裁きではなく、神のご計画、神の霊に従って行われます。

## III 救いの道を指し示す主イエス

主イエスの裁きが真実なのは、「自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わ



ないような苦しみに置かれることはありません。また私たちが天に属する者として、キリストが十字架の死から復活を遂げ、天に昇られたように、私たちにも肉の死において終わりではなく、永遠の生命が約束されています。

### III 「わたしはある」という神

「わたしはある」これは非常に理解しづらいことですが、一方、たいへん重みのある言葉です（参照・出エジプト三章一四節）。ここに神御自身の存在が語られており、「ある」とは、過去にあって存在し、現在存在し、未来にあって永遠に存在することです。つまり、神御自身の永遠性、つまり無限・不変・永遠に存在しておられる神であることを語っています（参照・ウエストミンスター小教理問四）。

皆さんは、自分自身の存在について揺らぐことがありますか。人を傷つけた時、人に傷つけられた時、苦難・艱難にある時などです。自分一人いなくても構わないと思ってしまう時、人は虚無感に陥り、自殺願望も芽生えます。自分の存在価値が揺らぐことは、ここに罪があるからであり、自分を見失ってしまうからです。

しかし、「わたしはある」と言われる方が、私たちの救い主として私たちと一緒にいてくださいます。そして「わたしはあなたを愛する。愛するが故に、あなたのためにキリストが十字架に架かった」とお語りくださいます。あなたは永遠の生命に満ちておられる神に愛されています。貴い存在であることが示されています。サマリアの女、ベトザラの池で癒された男のように罪人、無価値な病人とされている人々であっても、キリストと出会い、キリストを信じることにより、天に属する神の子として主はお迎えくださいます。

私たちにとって最も重要なこと、それは天国に属する主イエス・キリストに出会うことです。そしてキリストを知ることにより、天国における永遠の生命への歩みが開きます。この世に属する者として、死を待つばかりではなく、天国における永遠の生命への歩みが開きます。この世に属する者として、死を待つばかりではなく、天に属するキリストによって神の国の永遠の生命を求め続けていこうではありませんか。

### 「主イエスを遣わされた方」

ヨハネによる福音書八章二一〜三〇節

二〇一〇年五月二日

### 序

主イエスは、御自身が神の御子であり、上に属しており、この世には属していないこと、さらには、御自身の存在を示す言葉として「わたしはある」という者であることを語りました。この独特の表現は、主がモーセをイスラエルの指導者として立てられた時に、主御自身が自己紹介をされた言葉です（出エジプト三章一四節）。「かつてあり、今あり、そして永遠にある方」です。私たちはここに主なる神の無限・永遠・不変性を確認すべきです。

### I あなたは誰？

この主イエスの言葉に対して、ユダヤ人たちは「あなたは、いったい、どなたですか」（二五節）と問いかけます。この問いかけは私たちにとっても非常に重要です。

マタイ一六章一五節で、主イエスは使徒たちに「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と問いかけておられます。この時ペトロは直ちに「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えます。弟子たちは、この後、主イエスが逮捕され十字架に架けられる時、主イエスから離れていきます。しかしこの時既に、この方こそ、メシアであるとの確かな答えを持ち、生活を変換させ、キリストに従っていました。

ここで重要なことは、イエスが誰であるかを正確にすべてを理解して受け入れることができたら信じるのではありません。主イエスは弟子たちがこの後、暫く離れることを知っておられました。それを良しとしてくださいました。私たちは、イエス・キリストが、メシアであり私たちの救い主であることを理解した時、まず生活を変換させ、キリストを求め歩みを始めなければなりません。そして生き続ける限り、キリストがどの様なお方

であるのか、主がお語りになる御言葉により聞き続けることが求められます。

## II 主イエスの語られる言葉に聞け！

ユダヤ人たちの問いかけに、主イエスは「それは初めから話しているではないか」と答えられます。主イエスにとつて、宣教の初めの時から首尾一貫して語ってきたことです。そして、今まで語ってきた言葉を少しでも耳を傾けて聞いていたならば、真理を十分に理解することができました。今となつては、時を逸しています。

だからこそ、主イエスは続けて「あなたたちについては、言うべきこと、裁くべきことがたくさんある」と語られます。神の裁きは、救い主であるイエス・キリストを信じないことです。既に語られた主イエスの言葉において、真理は明らかにされてきました。

この時まで、いや現在にまで、主の裁きが行われていないのは、主が忍耐強くお待ちになつてからです。主イエスが来られたのは、世を裁くためではなく、信じる者を救うためです（三章一六―一七節）。しかしユダヤ人たちは聞く耳を持ちませんでした。主の裁きは最後の審判において完全に行われます。その時、彼らは主の裁きから逃れることができせん。

主イエスは続けて語られます。「しかし、わたしをお遣わしになつた方は真実であり、わたしはその方から聞いたことを、世に向かつて話している」（二六節）。ヨハネの最初からここまでも、主イエスが語られる御言葉に従つて、すぐに回心した人たち、弟子となつた人たちがいます。洗礼者ヨハネの二人の弟子（一章三五節以降）。フィリポ（一章四三節以降）、サマリアの女（四章）、ベトサダの池の病人（五章）……。つまり、主イエスが救い主であると認めることは、言葉数を重ね、第一課、第二課……と順番に終えたら理解できるものではありません。もちろん、主イエスの御言葉、そして今私たちが聞いている説教を聞くことにより、一瞬にすべての人が信じることができるかと言えば誤解です。徐々に理解を深めていく人たちもあり、回心するのは千差万別です。聖書の御言葉の説教が語られても、救い主である主イエスとの真実な出会いから遠ざけられている人々もいる

からです。

私たちに求められていることは知的に聖書を理解することではありません。主イエスの存在、つまり「わたしはある」と語られる無限・永遠・不変の神を受け入れ、信じることをしてこの方にすべてを委ね、この方の語られる御言葉に聞き従つて歩むことです。

## III 人の子を信ぜよ

しかし主イエスをメシアとして受け入れることのできない人々は、「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、『わたしはある』ということ」に気がつくのです（二八節）。「人の子」とは、主イエスが御自身のことです。メシアである方が、人として遜り、人間になられたことを語られています。「上げられる」とは、復活の後、神の国の栄光に入れられたこと、そして彼ら自身が十字架に架けたことです（参照・ダニエル七章）。つまり、この時はユダヤ人によつて主イエスが十字架に架けられた時、あるいは終わりの時に主イエスが再臨された時に、主イエスがメシアであるが分かつたとしても、それでは手遅れです。

キリストは、ユダヤ人たちに父なる神から遣わされた神の子、メシアであることをお示しになられたように、今、この御言葉を聞いている私たちにも、このことをお示しになつていきます。みなさんは、主イエス・キリストを信じることを「また今度」、「もつと理解してから」と思つていてはダメです。今、御言葉により示されたイエス・キリストが、「わたしはある」というお方であり、救い主であることが示されています。最初から御言葉に詳しくなくても良いのです。失敗しても構いません。弟子たちも躓きました。しかし主イエスはそれをよしとしてくださいました。だからこそ、今、主の御前に集められている私たちは、まず、主イエス・キリストを私たちの救い主と信じて、御言葉に聞き続け、主のお与えくださる救いの道を歩み始めることが、求められています。

## I 真の信仰者

主イエスが語ってきた福音を信じるユダヤ人たちも出てきました。私たちは「イエスを信じることは良いことだ」と短絡的に思っています。しかし主イエスは彼らの信仰に対して、「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である」（三一節）とお語りになります。ここで主イエスは、「信じる」と語ることで、主イエスに「とどまる」ことの違いを確認しつつ、本当に信じるとはどういうことであるかを、お語りになります。「信じる」と告白することは、その場限りの言葉になつてはなりませんし、「信じる」という言葉のみ繰り返すことに留まっていはいけません。つまり、主イエスを救い主として信じると告白する場合、「主イエスの内にとどまる」行為が伴います。

ヨハネにおいて、この「とどまる」という言葉に重要な意味を持ちます。いくつか確認致しましょう。「わたしは、「霊」が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た」（一章三二節）。ここは御子と御父、御霊のつながりの重要性を語っています。「御子を信じる人は永遠の命を得ているが、御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる」（三章三六節）。ここでは神の怒りが留まり続けることが語られます。「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていないながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる」（一五章一節以降）。まさに「とどまる」とは持続を意味します。変わらぬ信じ続け、愛し続け、祈り続け、悔い改め続け、己れと戦い続ける、これが主イエスの語られる信仰です。ですから、一時的な熱心はまことの信仰ではありません。信仰とは、永遠の救いに関するものですから、信仰も継続的に持続し続け、永遠でなければなりません。

そして、キリストに正しくとどまるためには、キリストの言葉にとどまらなければなりません。主イエスの御言葉なしにキリストのうちにとどまっているつもりでいても、独りよがりになり、それは真実の信仰とはなりません。キリストの御言葉にとどまるとは、御言葉を受け入れ、従い、実行し、かつ持続し続けることです。

## II キリストにより真理を知る

キリストの言葉にとどまり続けることにより、「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由に」します。これは、キリストの言葉の内に救いがあり、義・聖・真実の神の真実を知ることができるからです。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」（一四章六節）。キリストの内には神の真理があるため、真理を得るためにもキリストにつながることを求められます。

## III 奴隷となつたイスラエルと主による救い

では「真理があなたたちを自由にする」とはどういうことでしょうか？ 神を信じると生活が制限され、また礼拝のために時間を割くことが求められ、生活が不自由になると考えている人も多いでしょう。主イエスの語られる自由とは何か、考えなければなりません。ユダヤ人たちは「わたしたちはアブラハムの子孫です」と語り、キリストによる自由を拒絶しました。ユダヤ人たちが自分たちに与えられていると信じていた自由とは、アブラハムに与えられた神の契約の故です（創世記一二章二〜三節、一七章七〜八節等）。ユダヤ人にとって、アブラハムの肉の子孫であることで、神との永遠の契約に入れられていると思ひ込み、その使命として律法を一生懸命守っていました。だからこそ、自分たちは「奴隷」ではなく、「自由なのだ」との主張していました。しかし、ユダヤ人が本当に奴隷となつたことがなかったのか？ 旧約聖書は、繰り返しイスラエルが「奴隷」とされたことを語ります。食料を得るためにエジプトに下つたイスラエルは、四〇〇年にわたりエジプトで奴隷とされました。バビロン捕囚を忘れることもできません。また律法において、イスラエル人が奴隷から解放されることが規定されています。つまり七年に一度の安息年、五〇年に一度のヨベルの年がそれにあたります（レビ二五章）。つまり、神の約束

の民とされていたイスラエルであつても、繰り返し肉において奴隷とされてきました。また奴隷の状態から救い出してくださったのは常に主なる神です。つまりユダヤ人たちは、アブラハムの子孫であるからこそ自分たちは自由なのだと言っているのですが、実は「アブラハムの子孫」であり続けようとするがあまり、「律法」や「古しきたり」に固着し、神がお与えくださった恵みを忘れてしまいました。ちょうど、暴れ馬に乗せられている人が、たずなを強く持ち、馬から振り落とされないようにしているように、「律法」や「古しきたり」に寄りすがつていました。

しかし実際にはユダヤ人は罪の故に暴れ馬からすでに落とされています。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷であり、自由を得ていません。ユダヤ人たちは、この事実を忘れていました。このことが一番の問題です。すでに罪の奴隷であり、暴れ馬から振り落とされていることがはつきりと示されるならば、再び馬に乗せてもらわなければなりません。エジプト奴隷であつたイスラエルを救い出してくださったのは、主なる神です。パピロン捕囚から救い出してくださったのは、主なる神です。そして奴隷となつた人々に、自由をお与えくださる律法を定めてくださったのも、主なる神です。主の一方的な恵みにより、イスラエルの人々は、罪の状態にとどまることなく、アブラハムの子孫としての地位を保つことができました。

またユダヤ人が本当にアブラハムの子孫であれば、アブラハムがどのようにして信仰の父とされたのかを知っているはずです（創世記一五章五、六節）。アブラハムは主の約束を信じました。一〇〇歳になつてから約束の子イサクが与えられることを、そしてイサクを生け贄として献げるように促された時も、主を信じました。アブラハムは、主を信じて、主の語られる御言葉にとどまり続けました。そのため主はアブラハムを義と認められました。

罪の奴隷であることが示され、自由をお与えくださるために来られた御子に依り頼み、信じ、御子の語られる御言葉に聞き従うことこそが、罪の奴隷から解放され、真実の自由を得ることであると、主イエスは語られます（八章三四、三六節）。ユダヤ人たちは、この時、主イエスを信じる告白をいたしました。しかしその後、主イエスの言葉を受け入れることなく、主イエスを十字架に架けます。まさに彼らは一度は信仰を告白しつつも、キリストにとどまり続けることができませんでした。このことを主イエスは指摘されています。

#### IV 信仰はあなたを自由にする！

ユダヤ人たちが語る自由は、実は現在に生きる人々が求めている自由と同じです。つまり、人々は時間が拘束されることからの自由を求めます。規則から自由になることを求めます。そしてそうしたことが「自由」であると思つています。しかし、人々が考えているような「自由」は無秩序が生じるだけであつて、ユダヤ人と同じように、罪の奴隷とされているのであり、滅びの道を歩んでいます。

罪の奴隷が行き着く所は、永遠の苦しみです。この罪の奴隷から解放されるためには、私たちは自由をお与えくださる主イエス・キリストに行かなければなりません。キリストは十字架にお架かりになることにより、私たちを罪の奴隷から解放してくださいました。そして私たちに求められていることは、救いをお与えくださったイエス・キリストを救い主として受け入れ、信仰を告白することです。それと同時に、信仰にとどまり続け、御言葉に聞き続けることです。神によって与えられる救い、真実、自由は、今の時だけのものではありません。永遠に与えられ、約束されています。

私たちはこの後、聖餐式に与ります。主イエスが再び来られ、神の国が完成した時、キリストを信じ、キリストにつながるすべての民が、この聖餐に再び招かれ、本当の自由が与えられた喜びに満たされた食卓に与ることが許されます。

## I ユダヤ人はアブラハムの子？

ユダヤ人たちは「わたしたちの父はアブラハムです」（三九節）と語ります。これは、主イエスが「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」（一二節）、「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である」（三一節）とお語りになったからです。ここでの問題点は二つです。第一に、主イエスが神の御子、救い主であるか、ただの人間に過ぎないのかということ。第二に、神の子とされ、神の救いに与るためにはアブラハムにつながるかどうか、主イエスを信じるかどうかです。

ユダヤ人たちは、神の救いに与る根拠をアブラハムに求めました。彼らは、肉においてアブラハムの子孫としてつながっていることが、何にもまして重要なことでした。そして彼らの信仰の根拠は、アブラハムに与えられた契約です（創世記一二章一〜三節、一五章一七章一〜一六節等）。表現は悪いですが、彼らにとっての神の救いは、肉においてアブラハムの子として生まれ、律法をまつとうしその座から落ちないことでした。

## II ユダヤ人の信仰

しかし主イエスは「アブラハムの子なら、アブラハムと同じ業をするはずだ」と語られます。アブラハムは、主を信じて義とされ、神の子とされました。神から与えられた一方的な救いの恵み、神の子としての身分を確認しました。そして主のお語りになる御言葉、真理に耳を傾け続けました。アブラハムは、一〇〇歳になって独り子が与えられることを信じます。また主がイサクを献げるように命令された時にも主の命令に従います。アブラハムは主が命じられた言葉に真理を見いだして、信じました。主はこのアブラハムの信仰を良しとしてくださり、代わりの生け贄として献げる雄羊をお与えくださいました。

アブラハムの信仰は、神の子とされた者がどのようなようにして主に従うべきかを私たちに教

えています。神は肉に留まり続ければ死に行く者に、一方的に救いをお与えくださり、神の子とし永遠の生命をお与えくださいました。主にこそ真理があります。

ですから、ユダヤ人たちが主のお語りになった律法に留まることは必要なことでした。しかし問題は、主がお語りになった御言葉を自らの内に留め、変質しても、そのまま留め続けたことにあります。つまり律法を自分の内に留め、自分の都合の良いように誤った解釈を行い、主がお語りになった律法からかけ離れたものとなっていました。

だからこそ、主イエスが現れ、主なる神の真理の言葉を語り始めた時、ユダヤ人たちに与っては、自分たちの信じている教えとはかけ離れたものであり、主イエスを受け入れることができなくなっていました。このことは、主なる神から出てきた行為ではなく、人の罪、つまり悪魔から出てきたものであることを、主イエスは語ります（四三〜四四節）。

## III 神に属する者

主イエスは「神に属する者は神の言葉を聞く」（四七節）とお語りになります。神を信じる者は、地上に属する者ではなく、神に属する者、神から来た者です。神に属することは、自ら勝ち取るのではなく、神からの一方的な恵みによって与えられました。だからこそ自らの罪の赦しと永遠の救いの恵みに満たされ、感謝と喜びをもって、その身分に相応しい者として、主がお語りになる御言葉にひれ伏します。一方、いくらアブラハムの子孫であっても、主のお語りになる真理に聞こうとはせず、自らの思いに従って生きようとすると、それは地上に属する者であり、死の刑罰を避けて通ることができません。

主の御言葉に聞くと、第一に主がお語りになった御言葉である聖書の言葉に聞き続けることです。その御言葉から真理を求めます。それとあわせて、説教や聖書研究など御言葉を解説に聞きます。しかし神の御言葉に解釈が加えられる時、主イエスがユダヤ人たちに批判し断罪しているように、そこに人間の欲望、罪が混入し、誤ったことが語られる恐れもあります。だからこそ説教を聞く者は、語られる言葉に耳を傾けつつも、すべてを無批判的に受け入れるのではなく、真偽を確かめつつ聞くことが求められます。

つまりユダヤ人たちも、主イエスの言葉を、旧約聖書の律法に確認しつつ、その真義を  
確認しなければなりません。そうすれば主イエスが真の神の御子であることを確認  
できたはずですが。しかし彼らは聖書に帰ることなく、解釈された教えに留まり続けたこと  
に誤りがありました。私たちが説教を聞く場合も同じです。説教に誤りが混入し、解釈を  
変えることが有り得ます。だからこそ、私たちが説教を聞く場合、常に無批判に受け入れ  
るのではなく、誤ったことが語られていないか、注視することも必要です。

## 「イエスとアブラハム」

ヨハネによる福音書八章四八〜五九節

二〇一〇年五月三〇日

### I 「あなたはサマリア人である」

主イエスはユダヤの北ガリラヤのナザレの出身であることは、ユダヤ人たちの間にも知  
られていました（七章四一節）。ガリラヤは田舎町でしたが、ユダヤ人に同胞として受け  
入れていました。しかしサマリア人は、元々イスラエルの民でしたが、北イスラエルがア  
ッシリアに滅ぼされた後、アッシリアの人々と混血し、性的にも宗教的にも乱れ、イスラ  
エルから離れていったため、異邦人と見なされ、ユダヤ人からは罪人とされていました。  
つまり、ユダヤ人たちが主イエスを「サマリア人である」と語る時、ユダヤ人たちは主  
イエスを同胞としての交わりから完全に断ち、罪人として捕らえて殺そうとして狙ってい  
たことを物語っています。

この事に対して主イエスは言及されません。主イエスはサマリアの女を救いに導き（四  
章）、さらに善きサマリア人の譬えを語られます（ルカ一〇章二五〜三七節）。つまり主  
イエスは肉においてイスラエルであることは事実であり、そのことも神のご計画としてア  
ブラハムの子、ダビデの子としてお生まれになることは重要なことでしたが、御自身をと

おして全世界に救いが与えられることでは、すでに肉においてイスラエルでなければなら  
ないという意識はありませんでした。

### II 神の栄光

一方、ユダヤ人たちが「あなたは悪霊に取りつかれている」と語るのは、現在でも精神  
障害者を排除するように、自分たちの交わりから排除しようとした。このユダヤ人の  
言葉に対して、主イエスは「わたしは悪霊に取りつかれてはいない……」（四九節）とお  
語りになります。ここで語られていることは二つ。第一に、主イエス御自身は自らの栄光  
を求めていないこと。第二に、主イエスの言葉を守るなら、その人は決して死ぬことはな  
いことです。

「栄光」とは「かがやかしい誉れ、光栄、名誉」のことです。現在社会は、自分の栄誉  
を語っていかなければ、生きていけない社会です。自己推薦をして競争社会を生き抜かな  
ければなりません。しかし神の栄光とは、そういうものではありません。神御自身はすべ  
に栄光に満ちておられます。それは天地万物を創造されることにより、またそのすべてを  
統治されることにより、さらに神の国を完成させることによって明らかになります。神御  
自身がすでに栄光に包まれているからこそ、私たちは、太陽の光を月が反射して月光を見  
ることが出来ます（ウエストミンスター小教理問一）。

そして三位一体の第二位格である御子イエス・キリストもまた、本来、栄光に満ちてお  
られるお方です。だからこそ、主イエスはこの時、御自身で栄光について言及されること  
もおできになったことでしょう。しかし、主イエスはなさいませんでした。それは十字架  
に架かられるまで貫かれました。これは神の御子が、授肉され、人となられたこととの関  
係があると言つて良いかと思えます。キリストが肉をとられ人となられたのは、神の子と  
されるすべての民を救うために、律法に仕えられ、そして十字架において神の民である私  
たちの罪を贖つてくださるためでした（参照・フィリピ二章六〜一一節）。主イエスの栄

光は、御自身が十字架の死と死からの復活を遂げられることにより、さらに天に昇られることにより、御自身が神の御子として、栄光に満ちておられることが示されることとなるのですが、この時点において、主イエスは御自身の栄光を主張することはなさいません。私たちは、主なる神・御子イエス・キリストが持つておられる栄光が示された時、自らの内には栄光はないことが示され、遜り自らの罪を顧みつつ、悔い改め、同時に栄光を持つておられる主なる神を誉め称え、信じ、栄光を讃えるものとされています。

### III 永遠に生きる御子

ユダヤ人たちは、信仰のよりどころをアブラハムに求めます(五二〜五三節)。つまりアブラハムのみを見ているならば、「救われる」と言われても、永遠の生命は生じてきません。しかしアブラハムはどうであったのか。アブラハムは、最初に主と出会い、主によって召された時、主によって祝福に入れられます(創世記一二章)。だからこそ私たちも神によって示された聖書に求めなければなりません。

祝福に入るとは、まさに「栄光」に満ちておられる方の内に入ることであり、それは生きることです。アダムとエバの罪によって、人間は肉において死ぬ者となり、誰ひとり永遠の生命はありません。しかし神の祝福に入ることにより、神が持つておられる栄光の内、神の存在である永遠性を取り戻します。この時、三位一体なる父・子・聖霊なる神の交わりに入れられるのであり、アブラハムもまた、御子を見ていました。そのことが、主イエスの「あなたたちの父アブラハムは、わたしの日を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て、喜んだのである」(五六節)という言葉に表れています。

ここでアブラハムの時代にも生きておられた御子の永遠性に関しても確認いたします。神の御子は言葉です。天地創造の時、主は「光あれ」と言われ、光ができます。この言葉こそ、御子の働きです。そしてヨハネは福音書においては、最初から御子が言葉そのものであり、その方が授肉して人となられたことを言及します(一章一〜四節、一四節)。神の第二人格である御子は、天地創造の時から、言葉によって働かれ、人々に語りかけ、預

言をされ、そして聖書に語られ続けます。この方が、人となられるために遜られ、肉を取られました。天上におられる方が、下りて来られ、人となられました。だからこそ主イエスは、御自身のことを「わたしはある」と語ることがおできになるお方です。「過去にある」、「現在にある」、そして「これからもある」お方であり、永遠なるお方です。

だからこそ、アブラハムの時代にあつても、アブラハムは御子と人格的に出会っており、御子による救いに与ったことを語る事ができます。つまり今の時代に生きる私たちに對しても、栄光に満ちておられる主なる神、御子イエス・キリストは、私たちと共にいてくださることを語っており、私たちも神を信じ、神の祝福に入れられる時、キリストの十字架により罪が赦され、神の永遠性の内に入れられることが示されています。

このことを、主イエスは「わたしの言葉を守るなら、その人は決して死ぬことがない」(五一節)という言葉において宣言してくださいます。ユダヤ人は、アブラハムに立ち止まっていたましたが、アブラハムが示された主なる神を知り、信じる時、私たちも主による救いにあずかり、神の永遠性に入れられます。

だからこそ、ユダヤ人たちが神がお語りになる旧約聖書の律法を自らの解釈のうちに閉じ込めておいたようにするのはなく、主がお語りになる御言葉に聞き続け、御言葉の養いと従順によつて、主による救いの恵みに生きることが求められています。